

「格詞の語法」。

ト ㄱ ㄹ。

ㄴ ㅍ。

0 : アルカの格

アルカの表層格は格詞である。表層格は深層格を表す。だが、1つの表層格に1つの深層格が対応しているわけではない。ふつう、1つの表層格はいくつもの深層格を表す。つまり、1つの格詞は複数の深層格を表す。

では、深層格にはどのようなものがあるか。深層格は主に次のものである。

行為者：行為の主体。多くは動作主。偶に経験者。

対象：行為の客体となり、行為を被るもの。経験者も含む。

主題：繫辞文でのみ使う。解説によって説明されるもの。

解説：繫辞文でのみ使う。主題を説明するもの。

起点・源泉。

終点・受取人。

道具・材料。

原因

目的

場所

経路

時間

方向

関連：その文が関連するものや範囲を表し、話題の範囲やテーマを表す。

範囲

自然言語の場合、表層格と深層格の結びつきは複雑で覚えづらい。ところがアルカの場合、人工言語なので比較的1対1の対応を望める。

深層格の規定は言語学者によってまちまちであり、一致を見ない。そこでアルカは独自

に上記の格を深層格と認める。よく見られる経験者だが、これは行為者や対象に分散して含める。つまりアルカは心理的な変化を経験することと物理的な変化を経験することを分けないというわけである。

言語学書で経験者を目にすることが多いが、それは経験者を動作主などと区別すると論じる際に利点があるからそうしているまでである。その利点とは、例えば動作主は意志動詞と結びつき、経験者は無意志動詞と結びつくので、経験者を認めることによって両者を区別できるというものである。だがアルカではそもそも無意志動詞というのが殆どないため（見方によっては全くない）、経験者を仮定する必要がない。そこで経験者は深層格に立てなかった。

また、状態や位置の変化を被るものという意味での主題だが、これはアルカの場合、対象に含めて考える。これが行為者に來ることがないためである。

アルカで「主題」が表すのは繫辞文において解説によって説明されるものである。これは話題の範囲やテーマを表す主題とも異なる。話題の範囲やテーマを表すのは関連である。

1 : al

⊙

動詞の前に来る唯一の格。

強調文と倒置文以外では省略される。

行為者を表す。

主題を表す。

能動文のoΛは受動文のalに來る。

⊙

alは基本語順において唯一動詞より前に来る格である。alは強調文と倒置文以外では省略される。

能動文において、alは行為者を表す。alは意図的な物理的・心理的行為を行うものである

(1) (✓)。

(1) -Λ e-oΛe- 1-

(✓) -Λ 1-Λe 1-

alが最も多く取るのは行為者である。有生のほうが無生より優先的にalに来る。(i)は擬人法である。擬人法は文学的な言い方で、日常会話では頻度が少ない。(o)はメトニミーである。隣接性によって、小学校が教師を表している。メトニミーは日常生活にも多用される。

(i) Vɔʔʔ ʔeʔʔcʔ -ʔ (死が私を訪れた)

(o) ʔcʔ- ʔ-ʔʔe -ʔʔ- -ʔ ʔcʔV (小学校は子供にアルカを教える)

また、alは繫辞文の場合、主題を表す(f) (g)。

(f) -ʔ eʔ ʔ-ʔ。

(g) -ʔ eʔ ʔeʔʔ。

ふつうalは有生が来るが、繫辞文においては無生も抽象も来られる。更には節も来られる(9)。alが長くなる場合、どこまでがalであるか分かりやすくするためにʔce, ʔaʔでalを括ることもある。

(9) ʔce ʔc ʔaʔ- ʔa ʔaʔ -ʔ ʔec (君がそれを言ってしまったのは悪いことだった)

ところで、今までは能動文について述べたが、受動文だとalが取るものは変わる。受動文の場合、能動文のɔʔがalに来る。この際のalについては能動文のɔʔと同じであるから、そちらを参照すること。

。

✓ : ɔʔ。

。

⊙

基本語順において動詞の直後に来る。

強調文と倒置文以外では省略される。

能動文において、ɔʔは主に対象を表す。

対象には具象も抽象も来ることができる。節も来られる。

ɔʔは他の格の代用をすることがある。具体的にはʔ-, -ʔ, cl, V-ʔなどである。

能動文のalが受動文ではɔʔになる。

ɔʔがe>化されるとɔʔが表層に現れなくなる。

e>化されるのはɔʔが対象の場合だけでなく、場所などの場合もある。

⊙

ɔʔは基本語において動詞の直後に来る格である。直後といっても副詞が間に入ることはあ

るが、基本語順であるかぎり他の格は入れない。oΛは強調文と倒置文以外では省略される。能動文において、oΛは主に対象を表す。これは行為の客体となり、行為をこうむるもので、経験者も含む(1)(1)。

(1) 1- e-oΛ- -Λ (彼は私を殴った。-Λは行為の客体)

(1) 1- So- -Λ (彼は私を怒らせた。-Λは経験者)

対象は具象も抽象も来ることができる。より細かくいえば有生も無生も来ることができ、行為を表す動名詞の役割を持つ名詞も来ることができる。更に節を取ることもできる(2)。

(2) -Λ cΛ- 1- 7e:c <el7- (彼が学校へ行くのを見た。"1- 7e:c <el7-"という節がoΛ)

また、oΛは場所を取ることもある(3)。本来は7-格が取るべきところをoΛが担っている。

(3) -Λ し-:c μ-

同じく、oΛは方向を取ることもある。eel:eなどがそうである(4)。本来は7oμ格が取るべきところをoΛが担っている。

(4) -Λ eel- 1- (彼の方を向いた。1-は顔を向けた方向)

また、場所と似ているが、経路を取ることもある(5)。本来はV-μ格が取るべきところをoΛが担っている。(5)は"-Λ 7e- V-μ 0-1"とほぼ同じ意味であることから、このoΛはV-μの意味だと分かる。μ-7eの他にも7oΛ:e, 7oΛ:eなどの経路移動動詞はoΛがV-μの代わりに務める。

(5) -Λ μ-7e- 0-1 (山を越えた)

oΛは起点と終点を表すこともある(6)(Δ)。本来はcl, -1格が取るべきところをoΛが担っている。7e:e, 7oΛ:eのような終点移動動詞はoΛが-1の代用をする。

(6) -Λ 1oV- μ-

(Δ) -Λ 1eV- μ-

このように、oΛが他の格の代用となることがある。本来は他の格が持つ深層格をoΛが担っているのである。これはなぜか。oΛは-1などと違ってどの動詞にとっても必須格である。更に-1などと違って基本語順時に省略することができる。そのため他の格を使わずにoΛで代用することは経済性のある行為である。それゆえoΛが他の格の代用となることがある。

また、そもそも「行く」という行為の対象に目的地が選ばれるということも-1の代わりにoΛが使われる原因である。oΛに目的地が来る以上、-1でもう一度目的地を述べるのは無駄な重複である。このような事情もoΛが他の格の代用となる原因といえる。

尚、繫辞文以外の能動文は受動文に変えることができる。その際に能動文でalだったものがoΛに代わる(L)。また、繫辞文では動詞だったものがoΛに来る。このoΛはoΛ-である(10)。

(L) 1- e-oJz- -Λ → -Λ e-oJz- 4a 1-

(10) e> >e(ʔ- -Λ → -Λ -(ʔ >e(ʔ

(L)のoΛについては意味の上ではalなので、alを参照すること。また、(10)については上述のとおりで、>e(ʔは自然名詞で、先天完了の意味を持つ。

ところで、oΛがe>化する場合がある。これにはいくつか種類があるが、いずれにせよoΛがe>化した場合、oΛには何も表示しなくなる。alがe>化すると繫辞と自然名詞が来るが、oΛがe>化してもoΛが消えるだけで、その点では他の格と同じ扱いである。

oΛがe>化するのはどういう場合か。まず挙がるのはoΛが対象のときである。例えば-Λ ʔoΛ e (aにおいて、私が食べたのはこれだということが焦点化されなくなり、どうでも良いものと考えられたとき、(aはe>化する。つまり、私がこれを食べたことよりも、とにかく私が何か食べた、食事をしたということを強調したいとき、何を食べたかはどうでも良いのでoΛはe>化する。

尚、oΛが再帰形の場合、e>化することはない。しかし再帰は省略可能である。また、単にoΛを省略した場合とoΛをe>化した場合では厳密に言えば意味合いが違うが、日常的に区別する必要がないので言語上は違いを表現しない。

oΛがe>化する別の例は、oΛが対象以外の場合である。例えばʔ-eはoΛに場所を取る。つまり本来ʔ-が取るはずだったものである。「私は学校にいる」といえば-Λ ʔ-e <elʔ-である。<elʔ-は本来ʔ-が取るはずである。

では「学校の前にいる」に変わるとどうなるか。ʔ-はJ-に変わらねばならない。もし問題の文が-Λ ʔ-e ʔ- <elʔ-だったらʔ-をJ-に変えて-Λ ʔ-e J- <elʔ-にすれば良い。だが問題の文は正しくは-Λ ʔ-e <elʔ-である。これではʔ-をJ-に変えようがない。

そこで、この文のoΛがʔ-の代理をしているということと、oΛはこの基本語順文では省略されるという2点を考慮する。もしoΛを省略しなければ-Λ ʔ-e oΛ <elʔ-である。そしてこのoΛは事実上ʔ-である。ということはʔ-の代わりにoΛをJ-にすれば良い。ゆえに「学校の前にいる」は-Λ ʔ-e J- <elʔ-である。

oΛは場所を取るが、すでにJ-が場所を表しているため、J-に出番を奪われている。この際oΛはe>化し、言語上に現れなくなる。このように、oΛが対象以外を取るときもoΛはe>化することがある。

。

ʔ: -|

。

⊙

終点を表す。

-lを持つ動詞は有形・無形・物理的・心理的に関わらず、動きと方向を持つ。

-lが有生の場合、受取人としての終点の場合と場所としての終点の場合がある。

-lが無生の場合、着点や目的地などを表す。

着点や目的地は場所性を帯びているため、代名詞に変えると $\text{le}$  (le)でなく $\text{le}$ - ( $\text{le}$ )になる。

受取人は場所性を帯びないため、代名詞は $\text{le}$  (l-)で受ける。

時間的な終点も表せる。

clと共起する場合、時間的に先に来るclを優先させる。

$\text{le}$ の変化を表す動詞の場合、-lは結果を表す。

⊙

-lは終点を表す。終点があるということは-lを取る動詞は動きと方向を持つものであるといえる。これは $\text{le}$ のように、目に見える物理的な動きと方向だけではない。 $\text{le}$ のように、目に見えない疑問というものが問われた相手に向かって飛んでいく場合もある。また $\text{le}$ のように、心の中の祈りが-lに向けて飛んでいくという心理的なものもある。

このように、-lを持つ動詞は有形無形に関わらず、また、物理的・心理的に関わらず、動きと方向を持つ。

-lが取る終点が人のように有生の場合、ある行為や物の受取人とみなすことができる(1) (✓)。

(1) -l  $\text{le}$ -  $\text{le}$  -l l-

(✓) -l  $\text{le}$ -  $\text{le}$  -l l-

無生の場合、-lは終点という場所とみなされる。この場合の終点は着点や目的地などを表す

(?)。この場合、-lが取る名詞は場所性を帯びている。それゆえ、その名詞が代名詞になる場合、 $\text{le}$ でなく $\text{le}$ -で受ける(0)。 $\text{le}$ -は本当は $\text{le}$ である。 $\text{le}$ は場所でなければ $\text{le}$ で受けるが、この-lは終点という場所を取るので $\text{le}$ -になる。

(?) -l  $\text{le}$   $\text{le}$  -l  $\text{le}$

(0) -l  $\text{le}$   $\text{le}$  -l  $\text{le}$ -

もし-lが場所としての終点でなく、受取人としての終点を取った場合、その人が代名詞になっても $\text{le}$ -にはならない(†)

(†) -l  $\text{le}$ -  $\text{le}$  -l  $\text{le}$  = X -l  $\text{le}$ -  $\text{le}$  -l  $\text{le}$ - → -l  $\text{le}$ -  $\text{le}$  -l l-

また、-lは時間的な終点も表すことができる(9)。ちなみに、clと-lが同時に出る場合、時間的に先なclを先に述べる。

(9) -l ʃ-ɹ- <elʔ- cl ʔcʔʌo -l ʔoʌooʔe (私は9時から12時まで学校にいた)

また、(9)も時間の終点の一種である。この-lは10年後の再開の時点を示している。この時点が現在から見て待ち時間の終点であり、そのときようやく-ʔʔɹooという未来形の動詞が真になる。いってみればこの-lは現在から10年後までの待ち時間の終点を表しているといえる。

(9) -ʌʌo -ʔʔɹoo ʃooʔ -l ʔoʌ- ʔ-l (10年後にまた会いましょう)

尚、(9)は(Δ)とも言い換えられるが、その場合意味が異なる。(9)は10年後が待ち時間の終点であるため、それ以前に予定を繰り上げて会うことを意味しない。例えば8年目に会ってしまったら10年目は終点ではなくなり、8年目が待ち時間の終点になってしまうからである。ゆえに(9)の場合、10年経つまで一度も会うことがないということの意味する。もちろん事情が変わって先に会うという予定変更の可能性はある。

一方(Δ)では、私たちは少なくとも10年後に会うということしか言っていない。それ以前に会おうと会うまいと、とにかく10年後に会えば良い。ゆえに(Δ)の場合、10年後より前に会っても良いということの意味する。

(Δ) -ʌʌo -ʔʔɹoo ʃooʔ ʔc ʔoʌ- ʔ-l

また、-lが結果を表すこともある。>-ɹeのようなooʌに変化を与える動詞の場合、-lは変化の結果を表す。>cʌと異なるのは、-lは変化の結果を専門に表す点である(L)。

(L) -ʌ >-ɹ- h-ʔ -l heʔ (赤を黄色に変えた)

。

0 : cl。

。

⊙

起点を表す。

取る動詞は動きと方向を持つ。

有生の場合、所有者を表すことがある。

材料の源泉と集合の源泉を表すことがある。

完成品を見て材料がわかれば道具のʔoʌで、分からなければ材料の源泉のclである。

集合の源泉は場所性を帯びる場合があり、そのときはʔo-で受けることができる。

移動動詞などのclは出発点としての起点を意味する。

時間としての起点を表すこともある。

clと-lが同時に出る場合、clが先に来る。

oΛの変化を表す動詞の場合、開始状況や前提を表す。

⊙

clは起点を表す。起点があるということはclを取る動詞は動きと方向を持つものであるといえる。

clは有生の場合、所有者を表すことがある。<-l'eの場合、clは元の所有者である(1)。

(1) -Λ <-l'e- l'a cl l-

また、clが源泉を表すことがある。この源泉には意味が2つある。-l'eは「oΛをclから工夫する」という意味で、clは源泉である。この場合、clは工夫する材料としての源泉を示す。

尚、材料としての源泉は道具のoΛと対立を成す。l'eはclもoΛも使うことができるが、ニュアンスが異なる。clは材料の源泉を指し、oΛは材料そのものを表す。完成品を見たとき、その材料がすぐ何であるか目に見えるとき、その材料は「材料そのもの」なのでoΛで表す。

逆にその材料が何であるか分からないとき、その材料は「材料の源泉」、即ちclで表す。

要するに材料がすぐに分かる場合はoΛで、そうでなければclである。例えば椅子の材料はすぐ木だと分かるからoΛであり、バターは材料はすぐ牛乳だと目で見て分からないからclである。区別のポイントは、材料がそのままの形で残っているかということにある。椅子は木を木の形のまま使っているが、バターはもはや牛乳の形である白い液状物を保っていない。尚、一般にはどちらにもoΛを使うので、この区別は必ずしも明確ではない。

一方、<c'l'eは「oΛをclから差し引く」である。この場合、clはoΛが所属していたもの、或いはoΛを含む集合を指す。つまり、集合としての源泉である。

集合としての源泉は場所性を多少帯びている。そのため、代名詞にした際、o-で受けることも可能である。ただ、源泉が「生徒たち」のように有生の場合、場所性を帯びることはない。あくまで場所に近い名詞が源泉となっていたときだけである。委員会のような有生でない集合の場合、場所と取ることがありえる(1)。

(1) -Λ <c'l'e- l- cl -l- = -Λ <c'l'e- l- cl o-

また、clは起点を表すことがある。これはcl本来の用法である。移動動詞の場合、clは起点を表すことが多い。o'e, o'e'l'e, o'l'eなどはclを取るが、そのclはすべて移動の出発点としての起点である(1)。



(7) -Λ ʔoʔɔ- <elʔ- cl ʔ-。

ところで、clが-lと共に起る場合、起点を先に述べる。出発点のほうが終着点より移動者にとって先だからである(8)。

(8) -Λ >elʔɔ- ʔa cl <elʔ- -l ʔ-。

また、clは時間としての起点を表すこともある。ちなみに、clと-lが同時に出る場合、時間的に先なclを先に述べる(9)。

(9) -Λ >ʔɔ- cl ʔo -l ʔo (私は1時から7時まで寝た)

尚、(9)も時間の起点の一種である。私は10年前に最後に彼に会った。ここが待ち時間の起点である。それから10年間、今に至るまで彼に会っていない。それを表すのが(9)である。

(9) -Λ -ʔoʔɔʔ ʔ- cl ʔoʔ- ʔ- (10年ぶりに彼に会った)

もしこれが(9)になったら意味はどう変わるか。(9)では10年前に少なくとも一度彼に会ったということしか述べていない。それから今日に至るまでについては何も触れていない。だからその間に彼と会っていようといまいと問題にならない。だが(9)では彼と10年の間に一度も会っていない。そこが違いである。

(9) -Λ -ʔoʔɔ- ʔ- ʔ- ʔoʔ- ʔ- (10年前、彼に会った)

この違いは接続詞になっても変わらない。(Δ)と(L)では意味が違う。

(Δ) h-ʔΛ cleʔ ʔoʔ- ʔ- (10年来の友人 (今も友人))

(L) h-ʔΛ ʔ-eʔ ʔoʔ- ʔ- (少なくとも10年前は友人 (今はどうか不明))

また、oʔの変化を表す動詞の場合、clは前提や開始状況を表す。Zcʔとの違いは、clは変化に対する開始状況のみを表す点である(10)。

(10) -Λ >-ɔ- ʔc> cl h-ʔ -l heʔ (色を赤から黄色に変えた)

。

f : ʔ-。

。

⊙

動詞が起こる場所を表す。随意格。

ʔ-が取る名詞は場所性を帯びているので、代名詞はʔo-で受ける。

ʔ-を取る動詞はe-oʔɔeのように、物理的な動作を表す場合が最も多い。

ʔ-ɔeのように、oʔにʔ-が来るものを取られる動詞はʔ-を取れない。

-l, clを取る動詞もʔ-をまず取らない。取るとʔ-はその動詞が起こった場所全体を表す。

物理的な動詞 (e-oj'e)、心理的な動詞 (j-Λ'e) は7-を取れる。

観念的な動詞 (<-7'e)、関係を表す動詞 (7c7'e) は7-を取りづらい。

7-は物理的な空間を取る。メタファーやメトニミーなら人を場所化することもできる。

アルティスのような抽象的な名詞も場所と捉えることができる。

⊙

7-は動詞が起こる場所を表す。7-が取る名詞は場所性を帯びているので、代名詞は7o-で受ける。7-を取る動詞はe-oj'eのように、物理的な動作を表す場合が最も多い。

ただし、し-2'eのように7-が表すべきものをoΛがすでに表している動詞については、場所が重複してしまうので7-の出番はない。

また、7e2'eのように-lがすでに終点という場所を表している場合も同様で、7-の出番はふつうない。更にloV'eのようにclが起点という場所を表している場合も7-の出番はふつうない。厳密に言えば、7e2'eやloV'eなど、7-以外の格がoΛになっているものは、無理に7-をつけようと思えば付けることはできる。その場合、-lやclが終点や起点を表しつつ、7-はその移動が起こった場所全体を表す(1)。

(1) -Λ loV'- l- 7- -μΛ- (私はアルナで彼の元を去った)

7-は動詞の行われた場所を表すが、言い換えればそれは動詞を行ったalの場所を表す。j-Λ'eのような心理動詞にせよe-oj'eのような動作動詞にせよ、alは確かにどこかに存在するのだから、取ろうと思えば7-を取ることができる。

ただ、アルカでは7-は必須格ではない。alがどこかに存在することなど分かっているので、動詞を行った場所が特に問題視される時以外は随意格として現われない。そして、場所が問題視されるかどうかは動詞ごとに傾向がある。つまり、7-を取りやすいものとそうでないものがある。

e-oj'eのように物理的な動詞が最も7-を取りやすい。j-Λ'eのような心理動詞のほうが7-を取りにくい。また、7c7'eのような関係を表す静的な動詞や、<7c7'eのような計算を表す観念的で抽象的である静的な動詞は7-を取りにくい。そもそも「似る」や「倍にする」といった動詞が場所を問題にするとは思えないので、これは当然のことといえよう。

また、7-が取る場所自体はふつう「道」や「公園」などの物理的な空間である。だが、7-は空間ではない人間をも取ることができる。これは人間を場所化した用法で、多くは比喩である(1)。ここでは>ccμとは具体的にはμ- e >ccμのことである。ミールとミールの家の隣接性によりメタファーが成立している。

(ノ) -λ ㄱ-ᄃᄃcJ -l (c ㄱ- >ccP (ミールのところから君に電話をかけている)

更に、ㄱ-は非物理的で抽象的なものを空間として取ることができる(ㄱ)。また、(ㄱ)は(ㄴ)とも言える。アルティスは宗教という非物理的で抽象的なものであるが、(ㄱ)では空間と取られている。(ㄱ)の-P(cJ)はアルティスそのものではなく、アルティスが成す世界としての場所を指している。それに対して(ㄴ)の-P(cJ)はアルティスそのものである。尚、(ㄴ)のほうが頻度が高い。

(ㄱ) ㄱ- -P(cJ, a Jccᄃe (アルティスの世界では誰もそんなことしない)

(ㄴ) (c) -P(cJ, a Jccᄃe (アルティスでは誰もそんなことしない)

。

ㄱ: c>, c>-。

。

⊙

時点と時間を表す。

時間量はc>でなくλa。

定量・不定量は取れない。指示・時刻・日付は取れる。

c>は節や語も取れる。この場合、「～のとき」と訳して考える。

c>はJ-, Jcなどと違って厳密に1つの時点、即ちその動詞が行われる時点しか指さない。

時間が問題になりやすい過去の文や-ㄱᄃeなどはc>を取りやすい。

時制が通時のときは時間が問題にならないのでふつうc>を取らない。

⊙

c>は時点を表す。時点はその動詞が起こる幅のない時を表す。c>-は時間を表し、その動詞が起こる幅のある時を表す。例えば「7時に」という場合は幅のない時なので時点であり、「7時間」という場合は幅のある時なので時間である。

尚、時間量はc>では表せない。時間量はλa, c>-で表す。時間は時間量と同一視されることが多いため、事実上c>は時点を表し、λa, c>-が時間を表すといえる。

c>, c>-はその動詞が行われる時点や時間を表す。そもそも時間には下位区分がある。まず、時分秒や日週月年という定量の時間がある。更に、すぐ、ずっとといった不定量の時間がある。また、昨日や今日や現在といった指示的な時間がある。また、時刻という時間と、年月日という日付としての時間がある。

このうち、c>が取れるのはその動詞が行われた長さを示すものではない。どれだけその動

詞が行われたかはla, c>-が表す。ゆえに時間の長さを述べる定量や不定量は取れない(1)。

だが指示的な時間と時刻と日付はその動詞がいつ行われたかを示すのでc>が取れる(1)。

(1) X-Λ V-(c>- (c c> )o <e- → -Λ V-(c>- (c la )o <e- (1時間君を待った)

(1) -Λ -?c>- (c c> <-J (昨日君に会った)

また、c>は時を表す語以外を取ることでもできる。c>が節の場合もあるし、c>の後に名詞が来ることもある(2)(3)。これは「～のとき」を補って考えるものである。

(2) -Λ -?c>-J | c> (c ?-?c -| -Λ (君が私に電話したとき、私は彼と会っていた)

(3) | - (c -Λ) c> >cV (彼女は子供のときは可愛かった)

尚、時点を表すものはc>の他にJ-, Jcなどがある。これらは「～前に」「～後に」という意味で、基準となるある時点から時間的な距離を隔てた別のある時点を示す。だが、c>には基準となる時間がない。

むしろc>そのものが基準となり、別の時点は存在しない。c>はJ-, Jcと違って1つの時点しか問題にしない。これが相違点である。c>は純粹にその動詞が起こる時点という唯一の時点を表すだけである。

同じことは-l, clにも言える。これらは時間の起点と終点を表す。起点と終点ということは-l, clは時間軸上で移動と方向を持つといえる。だがc>には時間軸上の移動も方向もない。この点でc>は-l, clとも異なる。

また、c>は随意格である。c>を取りやすい動詞は時点が問題になりやすい動詞である。-?c>eなどはc>を取りやすい。また、過去の繫辞文も具体的にいつのことだか述べるためにc>を取ることが多い。逆に時制が通時を取るときは時点が問題にならないのでc>を取ることはない(4)。仮に(4)の私が性転換をして男になった場合、通時でなくなるのでc>が使える(5)。

(4) -Λ eC <-Λ

(5) -Λ -(c <-Λ c> )>cV. (c-l -Λ cC <cΛ c> (cZ

。

9 : ?oΛ, ?eΛ, o?, e?。

。

⊙

?oΛ

その動詞を行う際に道具として利用するものを表す。

抽具を取れる。節も取れる。

人を取る場合、利用するという悪い意味はない。

人を取る場合、上下関係や友好関係に関わらず使うことができる。

ㄗㄥは道具を表し、ㄗㄥは随伴を表す。装身具は普通ㄗㄥ。

ㄗㄥ

道具として伴わないものを示す。

「～なしで」と訳す。

取るものはㄗㄥと同じ。

ㄗㄥ

随伴を表す。

取るものはㄗㄥと同じ。

ㄗㄥ

随伴しないものを表す。

詳細はㄗㄥと同じ。

⊙

ㄗㄥは道具を表す。その動詞を行う際に道具として利用するものを表す。道具といっても金槌のような有形物ばかりではない。空気のような無形物でも良いし、思考のような抽象でも良いし、人のような有生を利用しても良い。人を取る場合、その人を利用するという悪い意味ではない。その人の能力を役立てるという意味で、上下関係や友好関係に関わらず使うことができる(1)。

(1) -ㄥ V-ㄥㄗㄥ- ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ (先生(の助言)を使ってこの問題を解いた)

また、ㄗㄥは節を取ることもできる(ㄗ)。

(ㄗ) -ㄥ V-ㄥㄗㄥ- ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ >el>- eㄥ Vㄥ Vㄥ- (円周率が約 3 であることを利用してこの問題を解いた)

一方、ㄗㄥは道具として伴わないものを示す。「～なしで」と訳す(ㄗ)。意味はㄗㄥの反対であるが、取るものはㄗㄥと同じである。つまり、物や人も取れるし節も取れる。

(ㄗ) -ㄥ hㄥㄗㄥ- ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ (鍵なしでドアを開けた)

一方、ㄗㄥはどうか。ㄗㄥとㄗㄥは意味が似ていて区別が難しい。ㄗㄥは道具を表し、ㄗㄥは随伴を表す。そしてㄗㄥもㄗㄥも物・人・抽象・節を取るることができる。では両者の違いは何か。

-ㄥ ㄗㄥㄥㄥ ㄗㄥㄥ ㄗㄥㄥ-というとき、彼は道具として考えられている。例えば彼が車を持っていてそ

れを使って運んでくれるというような場合である。前述のようにこれは彼を利用するという悪い意味ではなく、あくまで中立的である。ゆえに、車で送ってくれたという場面でも  $\text{?o}\Lambda \text{ } \text{I}$  といえる。

一方、 $-\Lambda \text{ } \text{?e}\text{?e} \text{ } \text{o?} \text{ } \text{I}$  といった場合、彼は随伴者として考えられている。彼は私が行くことに対して付いて来る人である。彼が私を車などで送るという意味ではなく、単に一緒に行く、付いて来るという意味である。

このように、道具と見るか随伴者と見るかが両者の違いである。ところで、人の場合は随伴者になることがすんなり分かるが、物の場合はどうだろうか。物が随伴するとはどういう意味か。  $\text{o?}$  が物を取る場合の随伴は付帯を表す。例えば装身具なら、身に付けているという意味での付帯である (  $\text{?}$  ) 。

(  $\text{?}$  )  $-\Lambda \text{ } \text{Ib}\text{?}\text{?c}\text{?} \text{ } \text{O-I} \text{ } \text{o?} \text{ } \text{?ol}\text{?}$  (スニーカーを履いて山を歩いている)

実は (  $\text{?}$  ) の  $\text{o?}$  は  $\text{?o}\Lambda$  ということもできる。その場合、何が違うか。  $\text{o?}$  の場合、ただスニーカーを身に付けているということしか表さない。  $\text{o?}$  の場合、スニーカーはただの装身具である。歩くという動作に付帯して付いて来るものにすぎない。

ところが  $\text{?o}\Lambda$  の場合、スニーカーは  $\text{o?}$  の場合よりも強く道具と見られる。山という悪路を歩くのに使う道具としてのスニーカーである。ただの装身具ではなく、山を歩く道具だと見なされる。サンダルのような歩きにくいものではなく、スニーカーという山登りに使える道具であると見なされる。

このように、物を取る場合でも、  $\text{?o}\Lambda$  が道具で  $\text{o?}$  が随伴という違いは生きている。また、このことから、普段身に付けているものは道具でなく装身具なので  $\text{o?}$  で表すことがわかる。このことは接続詞にも言えることである (  $\text{?}$  ) 。

(  $\text{?}$  )  $\text{?c}-\Lambda \text{ } \text{o?e}\Lambda \text{ } \text{?}-\text{e} \text{ } \text{h}-\text{?}$  (赤い服を着た女の子)

尚、  $\text{e?}$  は随伴しないものを表す。取るものは  $\text{o?}$  と同じである。  $\text{?e}\Lambda$  との違いは  $\text{o?}$  と  $\text{?o}\Lambda$  の違いに等しい。だから「靴を履いていない少女」は  $\text{?c}-\Lambda \text{ } \text{e?e}\Lambda \text{ } \text{I}-\text{?}$  である。

。

$\Delta : \text{?}-\Lambda, \text{?c}\Lambda$ 。

。

⊙

$\text{?}-\Lambda$

動詞が起こった原因を表す。

抽具も節も取れる。

強調しないかぎり他の格に後回しされる。

>cΛ

動詞が起こったことによる結果を表す。

詳細は>-Λと同じ。

強調しないかぎり他の格に後回しされる。

>-Λ, >cΛが共起した場合、ふつう>-Λが先。

◊

>-Λは動詞が起こった原因を表す。

尚、>-Λは抽具いずれも取れ、節も取れる(1)(✓)。

(1) -Λ ʔeʔ- ʔo- >-Λ ʔc。

(✓) -Λ ʔeʔ- ʔo- >-Λ ʔc ʔoʔc。

逆に>cΛは結果を表す。その動詞を行った場合の成り行きを表すのが>cΛである。>cΛは>-Λと違ってʔoΛと混同することはない。n対語だからといって、ʔeΛと混同することもない。他の詳細は>-Λと同じである。

尚、>-Λと>cΛは様々な格の中で常に最後のほうに来る格である。ただし、強調の際は文頭に持って来ることができる。いずれにせよ基本語順では>-Λ, >cΛは最後のほうに来る格である。ちなみに>-Λと>cΛが共起した場合、ふつう>-Λが先行する(ʔ)。状況によっては>cΛが先のこともある(∅)。

(ʔ)の場合、「君」が望んだのは彼が落ちることだけである。そしてそれによって彼は死んだ。

「君」は彼が死ぬことまで願っていなかったかもしれない。だが(∅)の場合、彼が落ちて死ぬことを丸々「君」は望んでいた。この点で両者は意味が異なる。だが、特にニュアンスが変わらなければふつう>-Λが先行する。

(ʔ) ʔ- >eʔʔ- cʔ ʔoʔʔ -ʔ- ʔo- >-Λ ʔc ʔ-ʔʔc ʔa >cΛ ʔ- ʔoʔʔʔc (君が望んだから、彼は頂上から地面に飛び降りて死んだよ)

(∅) ʔ- >eʔʔ- cʔ ʔoʔʔ -ʔ- ʔo- >cΛ ʔ- ʔoʔʔʔc >-Λ ʔc ʔ-ʔʔc ʔa (同上)

。

L : Z-Λ, ZcΛ。

。

◊

## Z-Λ

その動詞を行う目的を表す。語も節も取れる。抽具いずれも取れる。

λ-Λはすでに真であることを表す。Z-Λはこれから真にすることを表す。

ふつう未来を表すが、現在や過去を表すこともある。

⊙

## ZcΛ

最初の開始状況を表すものであるといえる。

ある動詞を行ったとき、どういう状況で行い始めたのかを表す。

Z-Λと違ってλ-Λとの混同は起こらない。

日付などの時点はcλ、21歳からはclなど、ZcΛを取らない開始状況もある。

⊙

Z-Λはその動詞を行う目的を表す。語も節も取れる。抽具いずれも取れる。何のためにその動詞を行うかというのは目的であるが、理由にも近い。よってZ-Λとλ-Λは混同しやすい。ではどう区別するか。

λ-Λの場合、λ-Λの内容はすでに真である。少なくともその話者の中では真である。(1)の場合、私が大学生であることは少なくとも話者の中では真、或いは真のつもりである。

(1) -Λ ʔeɣe <elʔ- λ-Λ -Λ eʃ >c<e-Λ (大学生なので学校へ行く)

だがZ-Λの場合、Z-Λの内容はまだ偽である。今は偽であることをこれから真に変えるべく、その動詞を行う。それを表すのがZ-Λである。(1)の場合、「私が未来に大学生であること」は今の時点では偽である。それを真に変えるため、つまりいずれ大学生になるために私は学校へ行くという動詞を行っている。

(1) -Λ ʔeɣe <elʔ- Z-Λ -Λ ɔʃ >c<e-Λ (大学生になるために学校へ行く)

Z-Λは目的で、これから叶えようとするものである。

λ-Λは未来も取れる(ʔ)。私は自分が父になることを確信しているので、未来のことでも理由に取れる。

(ʔ) -Λ ɔʃ >c -ʃɔʔɔΛ λ-Λ -Λ ɔʃ l-e (父になるからおもちゃを買っておく)

頻度は未来より低い。Z-Λが現在や過去を表すことがある(ʈ)(ʑ)。(ʈ)は落第しないように勉強する場合で、Z-Λは現在を表す。

(ʑ)はタイムマシンのパラドクスについて述べた例だが、かなり特殊である。私はタイムマシンを使って過去に戻り、父を殺し、父が自分の親でなかったことにする——という意味



である。「彼が私の父でなかったこと」は過去のことなのでZ-Λは過去を取るが、殺すことは私にとってはこれからのことなので未来である。

(d) -Λ <el>c -< Z-Λ -Λ c< >c >c<e-Λ (大学生であり続けるために数学を勉強する)

(f) -Λ Je<yo >oc l-e e ΛoJ Z-Λ l- -c oJ >- l-e e -Λ (私は彼が私の父でなかったようにするために自分の父を殺しに行く)

ZcΛは開始状況を表す。目的の反対である。目的とは、ある動詞を行ったことで発生させたい最終的な終了状況である。(f)では、私は学校へ行くことによって大学生になるという最終的な状況を発生させたい。この最終的な終了状況こそが目的である。

ということはZcΛは反対に、最初の開始状況を表すものであるといえる。ある動詞を行ったとき、どういう状況で行い始めたのかを表すのがZcΛである(g)。

(g) -Λ し-し- -μ- -l l- ZcΛ l- Je<cΛ a (無知の状態から彼にアルカを教えた)

尚、開始状況といっても、日付などの時点はc>の専門であるから時点のときはc>を使う。また、「21歳から」のように年齢を表す場合、clを使う。ZcΛが表すのは(g)のようなそれ以外の開始状況である。それ以外とは例えば開始時点での所持金を表したり、ゲームの初期設定を表したりと多彩である。

。

10 : <cΛ-, <cΛc。

。

⊙

<cΛ-

利益の受取人を表す。

「~のために」と訳すため、Z-Λと混同しがち。だが、Z-Λは利益を表さない。

<cΛ-は利益の受取人なので、ふつう人を取る。

人、動物、植物、無生、抽象の順で<cΛ-を取りやすい。抽象は低頻度。

<cΛc

損害を表す。

詳細は<cΛ-と同じで、利益が損害に変わっただけである。

⊙

<cΛ-は利益の受取人を表す。「~のために」と訳すため、Z-Λと混同しがちである。ではZ-Λとの違いは何か。Z-Λは目的であって利益は表さない。よって<cΛ- l-といえば彼は確実に何

らかの利益を受けるが、Z-A I-といえば彼は利益を受けるかどうかは分からない。Z-A I-の場合、彼はただの目的である。

(1)の場合、私がここに来たことによって彼は助けられたりといった何らかの利益を受ける。

(/)の場合、私がここに来た目的が彼である。最も一般的な解釈をすれば彼に会いにきたという意味である。

(1) -A 7eCxcA 7o- <cA- I-

(/) -A 7eCxcA 7o- Z-A I-

<cA-は利益の受取人なので、ふつう人を取る。節は生きていないので得を感じない。人や動植物、せいぜい無生までしか取らない。抽象を取るのは例が少ない。(?)で、-M(c)は宗教なので抽象だが、<cA-を取っている。私がこれを言ったことによってアルティスにとって何か都合の良いことが起きたという意味である。

(?) -A 7a7- (a <cA- -M(c) (私はアルティスのためにこれを言った)

逆に<cAcは損害を表す。詳細は<cA-と同じで、利益が損害に変わっただけである。

。

11 : Col, Cel, Mus, Mel。

。

☉

Col

和合と順側を表す。

従事や服従も表す。

順側とは逆側の反対で、逆でない同じ側という意味。

Cel

不服従と逆側を示す。

不服従は抵抗や反抗なども表す。

Celの逆側はColの反対で、対立する2者のうち、焦点が当たっていないほうを指す。

Mus

味方を表す。

Mel

敵対を表す。

☉

Colは和合と順側を表す。和合は従事や服従も表す。順側とは逆側の反対で、逆でない同じ側という意味である。

一方、Molは味方を表す。alはMolの味方としてその動詞を行うという意味である。このつまり、Colは服従だが、Molは味方である。

(1)の場合、私がこう言ったのは彼に命令されたからである。私は彼に服従している。(1)の場合、私がこう言ったのは彼に味方してやろうと考えたからである。

(1) -A 7a2- Ca Col I-

(1) -A 7a2- Ca Mol I-

また、Colが表す順側は同じ側の意味である。エルトとサールのように対立する2者のうち、エルトに焦点が置かれているとき、エルトに味方する場合、alはエルトと同じ側に立つのでColを使う。しかし、このColは服従と取ることもできる(?)。

(?) eK MecA V-7a2- -MleJ Col eM

明らかに服従でないといえる場合はColが有生でないときである(0)。学校の向かいに店があり、私は学校側に立っているとき、(0)のようにつ。

(0) -A 77-A2cA Col <el7-

逆に、Celは不服従と逆側を示す。不服従は抵抗や反抗なども表す。

一方、Melは敵対を表す(0)は彼に言うなと命令されたのに言った場合で、抵抗である。或いは彼に抵抗するために言ったものである。(f)は彼に敵対して言う場合である。

(0) -A 7a2- Ca Cel I-

(f) -A 7a2- Ca Mel I-

また、Celの逆側はColの反対で、対立する2者のうち、焦点が当たっていないほうを指す。学校の向かいに道があつて、学校から見て彼が道に立っている場合、(9)である。

(9) I- 77-A2cA Cel <el7-

。

17 : ol, J-1>, Jcl>, Cc-。

✳

その動詞が起こる条件を表す。話者が考える条件が成立する確率の高さによってこれらを使い分ける。

ol

確率は中立的。純粹に「もし～なら」という条件。

J-I>

高確率。恐らくそうなるだろう条件。

J-cl>

低確率。恐らくそうならないだろう条件。

!c-

反実仮想。そうでないと分かっているながらも、もしそうだったらと仮定する条件。

⊙

これらはすべてその動詞が起こる条件を表す。話者がどのくらいの確率でその条件が成立すると考えているかによってこれらを使い分ける。olは最も一般的で、条件が成立するかどうかは中立的である。とりわけ高確率とも低確率とも考えていない。

J-I>は積極条件といい、高確率で条件が成立する、或いはもう半ば成立した条件と考えている場合に使われる。

J-cl>は消極条件といい、J-I>とは逆に低確率を表す。恐らくそうならないだろうという目算があるときに使う。

!c-はJ-cl>より消極的で、反実仮想である。つまり、現実にはありえないと考えていながらそれでももしそうだったらと考える場合に使う。即ち事実と反する仮定である。!c-の場合、話者はその条件が偽であることを知っている。

以上に基づいて、用例を挙げる(1) (✓) (?) (⊙)。

(1) -! c!>yo e! ! ol e! (雨なら傘を買うだろう)

(✓) -! c!>yo e! ! J-I> e! (恐らく雨だろうから、傘を買おう)

(?) -! c!>yo e! ! J-cl> e! (恐らく雨は降らないだろうが、もし降ったら傘を買おう)

(⊙) -! c!>yo e! ! !c- e! ((晴天を見つつ) 雨が降るはずないが、もし降れば傘を買おう)

。

1? : !o!, !e!, !o!, !e!, !e!。

⊙

!o!

有縁を表す。つまり、その動詞にとって関係のあるものを示す。

「～について」や「～にとって」などと訳すことが多い。

!e!

無縁を表す。その動詞と関連性のないものを指す。

「～について関係なく」「～とは無縁で」「～以外には」などと訳す。

### loʌʃ

範囲内を示す。その動詞はloʌʃの範囲内で真である。

範囲は抽具いずれでも良いが、ふつう何らかの集合を取る。

### leʌʃ

範囲外を表す。

その動詞はleʌʃの範囲外で真である。

### ʌle

視点や観点を指す。「～にとって」「～から見て」。

⊙

ʃoʃは有縁を表す。つまり、その動詞にとって関係のあるものを示す。「～について」や「～にとって」などと訳すことが多い。

-ʌ ʌ-ʌ- ʌ- ʌ- という場合、単に私が彼を助けたとしか言っていない。これでは意味が漠然としていてどう助けたのか分からない。具体的な内容を述べるならʌalを使うが、何に関して助けたのか大雑把なガイドラインを提示する場合、ʃoʃを使う(1)。

(1) -ʌ ʌ-ʌ- ʌ- ʌ- ʃoʃ ʌ-ʌel (宿題について彼を助けた)

また、ʃa eʃ ʌeʃといえ、これが難しいと漠然と言っているにすぎない。掛け算は5歳の子供には難しいが、大人には簡単である。ʃa eʃ ʌeʃだけでは誰に関して難しいのかまでは分からない。そのようなときもʃoʃやʌleを使う(ʌ)。

(ʌ) ʃa eʃ ʌeʃ ʌle[ʃoʃ] -ʌ (私にとってこれは難しい)

一方、loʌʃは範囲内を示す。その動詞はloʌʃの範囲内で真である。範囲は抽具いずれでも良いが、ふつう何らかの集合を取る。ʃoʃと違って、「～にとって」という意味はない。ゆえに(ʃ)は非文である。loʌʃは(ʌ)のように使う。

(ʃ) × ʃa eʃ ʌeʃ loʌʃ -ʌ。

(ʌ) ʃa eʃ ʌeʃ loʌʃ ʌʌo (問題の中でこれが難しい)

繫辞文の場合、alはloʌʃという集合の成員である(ʌ)。「これ」は「私」の成員ではないから(ʃ)は非文である。また、繫辞文でない場合はどうか。この場合(ʃ) (ʌ)で分かるとおり、alでなくʌʌがloʌʃの成員であるか、loʌʃの範囲内に存在する。

(ʃ) -ʌ loʌʃ- ʌʌʌ loʌʃ ʌʌʌ (公園内の道を歩いた)

(ʌ) -ʌ ʌ-ʌʌ- ʌʌo loʌʃ <ʌec h-ʌ (赤いページの範囲の問題を解いた)

一方、 $\text{CeC}$ は無縁を表す。その動詞と関連性のないものを指す。「～について関係なく」「～とは関係なしに」「～とは無縁で」「～とは無関係で」「～以外には」などと訳す。詳細は $\text{CoC}$ と同じである(9)。(9)は宿題以外のことについて彼を助けたということである。例えば宿題でなく予習を手伝ってやったりすることである。

(9)  $-\Lambda \text{ l-l-r- l- CeC } \mu\text{-kel}$  (宿題とは関係なしに彼を手伝った)

一方、 $\text{leuC}$ は範囲外を表す。詳細は $\text{louC}$ と同じである。その動詞は $\text{leuC}$ の範囲外で真である( $\Delta$ )。

( $\Delta$ )  $-\Lambda \text{ loC-r- } \text{?o}\Lambda \text{ leuC } \text{Je}\text{?l}$  (庭の外の道を歩いた)

。

10 :  $\text{la}, \text{C-l-}, \mu\text{-J}$ 。

。

⊙

$\text{la}$

量を表す。具体的には数量と時間量を表す。

数量は重さ、長さ、数など、数の量なら何でも取れる。

単位を表す場合、数量の後に単位を述べる。

量が1単位量るとき、 $\text{?o}$ は省略できる。

回数だけは $\text{la}$ でなく $\mu\text{-J}$ で表す。

時間量を表す場合、日付のような時点ではなく、時分秒などの時間を取る。

夏休みの間というような場合、ふつう期間の $\text{lo}$ を使い、 $\text{la}$ は避ける。

具体的な量を表す語だけでなく、節で表された量も表せる。

$\text{C-l-}$

単位を表す。

普段は $\text{la}$ で代用するが、 $\text{la}$ が節を取るとき役に立つ。

$\mu\text{-J}$

動詞の行われる回数を表す。

回数が数えられない動詞には付かない。

意外と多くの動詞が数えられる。 $\text{J-l}\text{:e}$ も数えられる。

$\mu\text{-J}$ を単位として名詞にすれば $\mu\text{-J}$ でなく $\text{la}$ を使って回数を表せる。

⊙

laは量を表す。具体的には数量と時間量を表す。数量は重さ、長さ、数など、数の量なら何でも取れる。単位を表す場合、数量の後に単位を述べる。単位はメルバのような公的なものでも良いし、コップ1杯でも良い。また、量が1単位量るとき、ㇿは省略できる(1)。

(1) -Λ ㇿeΛㇿ- ㇿeΛ la ㇿ-ㇿ (コップ1杯の酒を飲んだ)

尚、回数だけはlaでなくㇿ-ㇿで表す(1′)。どうしてもlaを使いたければㇿ-ㇿを単位にして表す(1′′)。ㇿ-ㇿも単位であるから、1回の場合、ㇿは省略できる(1′′′)。ゆえにこれは格詞の重複ではない。

(1′) × | - ㇿoΛㇿㇿ- -Λ la ㇿ- → | - ㇿoΛㇿㇿ- -Λ ㇿ-ㇿ ㇿ-

(1′′) | - ㇿoΛㇿㇿ- -Λ la ㇿ- ㇿ-ㇿ

(1′′′) | - ㇿoΛㇿㇿ- -Λ la ㇿ-ㇿ

時間量を表す場合、日付のような時点ではなく、時分秒などの時間を取る。定量・不定量のどちらでも良い(1′′′′)。

(1′′′′) -Λ |oㇿㇿ- ㇿo- la ㇿ- <e-

夏休みの間というような場合、ふつう期間の<|oを使い、laは避ける(1′′′′′)。時間量のlaは日や分秒などを表すのに多く使われる。

(1′′′′′) -Λ <e|ㇿ- -K <|o ㇿeㇿc<c|

また、laは具体的な量を表す語だけでなく、節で表された量も表せる。数量も時間量もある(1′′′′′′) (Δ)。

(1′′′′′′) -Λ ㇿoΛㇿㇿ- ㇿe| la -Λ ㇿ-ㇿㇿc ㇿa (私がそれを必要とする分だけキャベツを食べた=必要なだけキャベツを食べた)

(Δ) -Λ cΛㇿㇿ- | - la -Λ ㇿoㇿc| | - (私は見たいだけ彼を見た)

尚、(1′′′′′′) (Δ)は単に(L) (10)に言い換えることもできる。

(L) -Λ ㇿoΛㇿㇿ- ㇿe| la ㇿ-ㇿ

(10) -Λ cΛㇿㇿ- | - la | -ㇿ

ところで、laで表す数の後に単位を付ければ単位を表すことができた。だが、そうしなくてもㇿ-|という格詞を使えば単位を表すことができる。(11)と(11′)は同義である。

(11) -Λ cΛㇿㇿ- | - la ㇿ- <ec

(11′) -Λ cΛㇿㇿ- | - la ㇿ- ㇿ-| - <ec

(11)のほうが簡単であるため、ふつうは(11)の言い方をする。単位を数の後に付けられるのだからlaさえあればㇿ-|は要らない気がする。ところがそうとも限らない。ㇿ-|はlaが具

体的な数を取るときには確かに役に立たない。ところが $\text{la}$ が節を取るとき、役に立つ。(17) はゲームのルール説明などで使われるような例である。

(17)  $\text{C } \text{q-}\text{ŋel } \text{YeJ } \text{la } \text{-}\text{lu } \text{e}\text{-} \text{C } \text{-}\text{S}\text{:}\text{c } \text{ŋ}\text{a} \text{Z-}\text{Al } \text{C-}\text{l-} \text{ke}\text{o}$  (君がサイコロを投げて示した目の秒数だけ、君はコースを進むことができる)

一方、 $\text{M-J}$ は回数を表す。その動詞を何度行ったかを表す(10)。勿論、回数が数えられない行為には使えない。ただ、 $\text{J-}\text{A}\text{:}\text{e}$ は一度好きになってそうでなくなって、また再燃するということが考えられるので、回数がある。意外に多くの動詞が数えられるので注意。

(10)  $\text{l- } \text{J}\text{a}\text{ŋ}\text{e}\text{-} \text{-}\text{A } \text{M-J } \text{C-}$  (彼は2回私を撫でた)

もし $\text{M-J}$ の代わりに $\text{la}$ を使う場合、(1f)のようにいう。つまり、 $\text{M-J}$ を単位として名詞にするわけである。

(1f)  $\text{l- } \text{J}\text{a}\text{ŋ}\text{e}\text{-} \text{-}\text{A } \text{la } \text{C-} \text{M-J}$

。

$\text{1f : le}\text{u}$ 。

。

。

$\text{le}\text{u}$ は同格の格詞である。

$\text{lel}$ は同格の接続詞である。

$\text{le}\text{u}$ は $\text{lel}$ と違って格詞なので格組に入ることができる。

格組の中に $\text{le}\text{u}$ を含む動詞は決まっていて、量はそう多くない。

$\text{e}\text{J}\text{ŋ}\text{:}\text{e}$ ,  $\text{-}\text{A}\text{u}\text{:}\text{e}$ ,  $\text{S-}\text{l}\text{:}\text{e}$ などがそうである。

いずれも「 $\text{ŋa}$ を $\text{le}\text{u}$ に決める」という共通意義を持つ。

$\text{-}\text{A } \text{-}\text{A}\text{u}\text{:}\text{e } \text{l- } \text{le}\text{u } \text{C}\text{ŋ}\text{a}\text{ŋ}$ と $\text{-}\text{A } \text{-}\text{A}\text{u}\text{:}\text{e } \text{l- } \text{lel } \text{C}\text{ŋ}\text{a}\text{ŋ}$ では意味が異なる。

。

$\text{le}\text{u}$ は同格の格詞である。 $\text{lel}$ は同格の接続詞である。品詞が違う。

$\text{le}\text{u}$ は格詞なのでその動詞が取る何かの必須格との同格を表す。具体的には $\text{ŋa}$ との同格を表す。

$\text{le}\text{u}$ は $\text{lel}$ と違って格詞なので格組に入ることができる。格組の中に $\text{le}\text{u}$ を含む動詞は決まっていて、量はそう多くない。 $\text{e}\text{J}\text{ŋ}\text{:}\text{e}$ ,  $\text{-}\text{A}\text{u}\text{:}\text{e}$ ,  $\text{S-}\text{l}\text{:}\text{e}$ などがそうである。いずれも「 $\text{ŋa}$ を $\text{le}\text{u}$ に決める」という共通意義を持つ。 $\text{e}\text{J}\text{ŋ}\text{:}\text{e}$ の場合は名前決定であるし、 $\text{-}\text{A}\text{u}\text{:}\text{e}$ の場合は呼び方決定であるし、 $\text{S-}\text{l}\text{:}\text{e}$ の場合は決定そのものを表す。



このように、何らかの決定に関わる動詞にleしを取るものが多い。他にもS-ə̀eなどがある。いずれもoΛをleしと同格で決定するという共通意義を持つ。

lelとの違いは接続詞か否かということだが、具体的に意味はどのように違うのか。(1)では私は彼をティクノと呼ぶだけであり、私にとっての呼び名がティクノというだけである。実際にティクノかどうかは不明である。ふつう本名が来るが、あだ名も来ることがあるから、その場合は本名ではない。

ところが(1)の場合、私はティクノである彼を呼んだという意味である。この場合、彼は確実にティクノである。

(1) -Λ -Λə̀e 1- leš (c)Λo (彼をティクノと呼ぶ)

(1) -Λ -Λə̀e 1- lel (c)Λo (私はティクノである彼を呼んだ)

また、oΛが長くて-1が短い場合、oΛを@aにして実際の内容を繰り越すことがある。その繰り越しを受けるのがleしである(1)。

(1) -Λ <c(ə̀- @a -1 1- leš ʔcl -Λ (c)ə̀ə̀cΛ (彼に持っていた金を渡した)

。

11: 4al, ʔoΛc, ʔeΛc。

。

⊙

4al

内容格。その動詞の具体的な内容を述べる。

ふつう節が来るが、語も来られる。

「～することによって」などと訳す。

4alでは主節の動詞の具体的な内容を述べるので、全体としては独立した1つの行為である。

ʔoΛc, ʔeΛc

同時格。その動作を行うのと同時に行う内容が来る。

ふつう節が来るが。語もこられる。

「～しながら」などと訳す。

ʔoΛcは主節の動詞と同時に起こる別の行為である。ゆえに全体として2つの行為である。

ʔeΛcはその否定で、「～しないながら」。

⊙

4alは内容格である。その動詞の具体的な内容を述べる。ふつう節が来る。-Λ ə̀1- 1-は彼

を助けたという意味だが、これだけだとどう助けたのか分からない。そこで助けた内容を具体的に述べるのが $\forall a l$ である(1)。 $\forall a l$ は通常、「～することによって」などと訳す。

(1)  $-A l-l\dot{r}- l- \forall a l -A \dot{u}-\dot{u}c -k$  (数学を教えることによって彼を助けた)

尚、 $\forall a l$ は語を取ることもある(ノ)。

(ノ)  $-A l-l\dot{r}- l- \forall a l \dot{u}-\dot{u}$  (教えることによって彼を助けた)

ところで(1)において、 $\dot{u}-\dot{u}e$ は $l-l\dot{r}e$ の具体的な内容である。つまり $\dot{u}-\dot{u}e$ はこの例では $l-l\dot{r}e$ の一種であり、 $\dot{u}-\dot{u}e$ は $l-l\dot{r}e$ と別物ではない。ということは私がした動作は「助けた」だけである。そしてその具体的な内容が「教えた」である。「助けた」と「教えた」は別々の行為ではない。これを踏まえて $\forall a l$ へ行く。

$\forall a l$ は同時格である。その動作を行うのと同時に行う内容が来る。やはりふつう節が来る(ク)。

(ク)  $-A l-l\dot{r}- l-ve \forall a l c\dot{A}\dot{r}c (ec)$  (テレビを見ながら料理した)

(ク)  $-A l-l\dot{r}- l-ve \forall a l (\dot{u}-\dot{u})$  (おしゃべりしながら料理した)

では、 $\forall a l$ と $\forall a l$ の違いは何か。 $\forall a l$ は主節の動詞と同時に起こる別の行為である。先に述べたとおり、 $\forall a l$ は1つの動作しか表さない。「助けた」と「教えた」は別の行為ではない。ところが(ク)の「料理した」と「見た」は別々の行為である。この点が $\forall a l$ と $\forall a l$ の違いである。

。

19 :  $\forall a l, \forall-\forall, \forall c\forall, \forall o\forall, \forall e\forall$ 。

。

⊗

抽具取れる。節も取れる。ふつう有生、特に人を取る。

$\forall a l$

抽具取れる。節も取れる。ふつう有生、特に人を取る。

非現実の様態比況を表す。

「～であるかのように」。

$\forall-\forall$

抽具取れる。節も取れる。ふつう有生、特に人を取る。

「～と同じで」という意味である。

現実の様態比況を表す。



(f)とも言い換えられるが、(f)では私は彼と反対である。私は賢いの反対なので馬鹿である。  
ㄱㄱと違って、ㄱeㄱは反対を示すため、ふつうであるという解釈を許さない。

(f) ㄱ- eㄱ le-ㄱ ㄱeㄱ -ㄱ。

ㄱ-ㄱ~ㄱeㄱはこのように類似性を表す。ふつう有生の語を取るが、抽具でも良いし、節も取れる(i)。

(i) -ㄱ ㄱcㄱe ㄱ- ㄱ-ㄱ ㄱc ㄱe (君が彼を嫌いなのも同じく私も彼が嫌いだ)

。

1Δ : -le。

。

⊙

性質や役割を表す。

「～として」と訳す。「父として」「教師として」など。

語を取る場合、alの性質や役割を表す。

節を取れば誰の役割か明示されるのでㄱcなども表せる。

al節が長い場合、alを繰り越した代替の節になる。

⊙

-leは性質を表す。「～として」と訳す。「父として」「教師として」など、alがその動詞を行う際の自分の性質や役割を表す(1)。

(1) -ㄱ ㄱcㄱ- >ce -le ㄱe (父として息子を叱った)

尚、-leはㄱcの役割は表せない。ゆえに「息子を子供として叱った」という場合、-leは使えない。-leはalの動詞に対する性質を表す。(1)では息子は私であり、彼という解釈はできない。

(1) -ㄱ ㄱcㄱ- ㄱ- -le >ce。

また、主格節が長いときの代替節となる。(2)ではㄱaの内容が「私があの問題を解くこと」に相当する。つまり主語を繰り越しているわけである。

(2) ㄱa eㄱ ㄱeㄱ -le -ㄱ V-ㄱㄱc ㄱc le (私があの問題を解くのは難しい)

。

1L : V-ㄱ, <ㄱ。

。

⊙

## V-μ

経路を表す。

物理的・抽象的・時間的経路のいずれも取れる。

抽象的な場合、辛い経験も甘い経験も隔てなく取れる。

時間的な場合、短期で集中して行うというニュアンスを持つ。

## <lo

期間を表す。

相は省略されやすい。

V-μより長期で、小休止を入れつつ地道に行うというニュアンスを持つ。

⊙

V-μは経路を表す。物理的な場所としての経路(1)や、人生で経験した抽象的な経路を表す(∨)。後者は「～を経て」と訳すことが多い。

(1) -Λ 7eɜ- <el7- V-μ ɔoΛ le7 (狭い道を通って学校へ行った)

(∨) -Λ V-μcɜ- 1- V-μ ʃoΛ 7cΛ (辛い訓練を経て彼に勝った)

日本語では「～を経て」はつらいことを表す場合が多い。「甘い生活を経て苦しい生活になった」よりも「つらい訓練を経て勝利した」のほうがしっくり来る。「経る」は移動を表す。移動には労力がかかり、楽なことではない。そこから辛いことと結び付きやすいのだろう。だがアルカの場合は純粋に経路しか表さない。人生の経験も経路として捉えるだけで、つらいことを表しやすいという特徴はない。アルカに訳すときにつらいことばかりV-μで書かないように注意が必要である(ʔ)。

(ʔ) -Λ cʃ >- 7-ʃ V-μ 1-ε 7-Λ (楽な仕事を経て金持ちになった)

また、V-μは時間も経路に取ることができる。「～の間中」と訳すことが多い(ʘ)。

(ʘ) -Λ <elɜ- -1< V-μ <cɔ (休みの間中、数学を勉強した)

一方、<loはその動詞が行われる期間を表す。主節の動詞の相はふつう省略される(ʧ)。

(ʧ) -Λ <elɜ- -1< <lo <cɔ (休みの間、数学を勉強した)

V-μはその間中休まず行為をしているイメージで、<loは期間内に休み休みしたというイメージを持つ。無論、休まなくても良いが。V-μは元々経路を表すので、その経路をずっと抜かさず通るわけだから、休まず行為をしているイメージに繋がる。ちなみに期間内に最低1度というのはJoVで表す。

。

✓0 : e>-, ㄱ-ㄱ。

。

⊙

e>-

1 回量を表す。「～ずつ」と訳す。

数量の後に単位を取れるし、単位をㄱ-ㄴに任せることもできる。

節も取れる。

ㄱ-ㄱ

周期を表す。「～ごとに」と訳す。

1 回が巡ってきてから次の 1 回が巡って来るまでの期間を表す。

ㄱ-ㄱと同じく単位を後続できるし、ㄱ-ㄴに任せることもできる。

不定の周期も表すことができる。

⊙

e>-は 1 回量を表す。1 回における量を表すだけで、後はㄹaと同じである。つまり数量の後に単位を取れるし、単位をㄱ-ㄴに任せることもできる(1)。

(1) -ㄴ ㄴeㄹ>- Veㄹㄴ e>- >eㄹe- c> ㄹeㄴeㄹ (毎日酒を1メルバずつ飲んだ)

e>-もまた節を取ることができる(✓)。

(✓) ㄴ- <cㄹ>- ㄹcl -ㄴ -ㄴ e>- -ㄴ ㄴ-ㄴ>c ㄹa (私が欲しい分ずつ、毎回彼は金をくれた)

一方、ㄱ-ㄱは周期を表す。「～ごとに」と訳す。1 回が巡ってきてから次の 1 回が巡って来るまでの期間を表す(ㄱ)。ㄱ-ㄱと同じく単位を後続できるし、ㄱ-ㄴに任せることもできる。やはりㄱ-ㄱも節を取れる(⊙)。

(ㄱ) ㄴ- ㄴo>>- -ㄴ ㄱ-ㄱ ㄱ- ㄴeㄹ (1 日置きに彼は私のところへ来た)

(⊙) ㄴ- <cㄹ>- ㄹcl -ㄴ -ㄴ ㄱ-ㄱ ㄴ- ㄱ->>c ㄹa (彼は金を得るたび私にくれた)

尚、(ㄱ)(⊙)の大きな違いは周期が規則的か否かである。(ㄱ)は 1 日置きと決まった周期であるが、(⊙)は金が入り次第だからいつになるか分からない。ㄱ-ㄱはこのように、不定の周期も表すことができる。

また、ㄱ-ㄱは「5 日に 2 日」というような複雑な周期も表すことができる(ㄱ)。

(ㄱ) -ㄴ ㄴo>>- ㄴ- ㄱ-ㄱ ㄱ- e ㄴc ㄴeㄹ。

。

✓1 : ㄴoㄹ。

。

☉

「相対的に」という意味である。「～と比べると」と訳す。

相対化の基準としての比較対象を表す。

繫辞文に多く使われる。繫辞文以外にも使える。

集合を取って、「～としては」という意味を持つことがある。

☉

ㄱᄇᆞᆯは「相対的に」という意味である。「～と比べると」と訳す。相対化の基準としての比較対象を表す。繫辞文に多く使われる(1)。

(1) -ㄴ eᄇ ᄇᄇᆞᆯ ㄱᄇᆞᆯ ᄇ-ᄇᄇ (私はクラスでは背が高い)

尚、(1)はㄱᄇᆞᆯでなくᄇᄇᆞᆯに代えることもできるが、意味が異なる。ㄱᄇᆞᆯはクラスとの相対化なので、クラス平均との比較である。ゆえにㄱᄇᆞᆯの場合、私は平均値よりも背が高い。だがᄇᄇᆞᆯの場合、そのクラスの中で背が高いことを示すので、上から数本の指に入るほど背が高いことを意味する。

ㄱᄇᆞᆯは集合を取って、「～としては」という意味を持つことがある(ㄴ)。哺乳類を含めれば象のような巨大なものがいるので、鷹は必ずしも大きくない。

(ㄴ) ᄇ-ᄇ- eᄇ ᄇ-ᄇ ㄱᄇᆞᆯ ᄇᄇᄇᄇ (鷹は鳥としては大きい)

また、ㄱᄇᆞᆯは繫辞文以外にも使うことができる(ㄷ)。

(ㄷ) -ㄴ -ᄇᄇᄇᄇ ᄇᄇᄇ ᄇᄇᄇ ㄱᄇᆞᆯ ㄴᄇᄇ (私は人より多くの金を持っている)

。

ㄴᄇᄇᄇ : ᄇᄇᄇ-, ᄇᄇᄇᄇᄇ。

。

☉

ᄇᄇᄇ-

例示を意味する。「例えば」と訳す。

比喩の「例えば」の意味はない。あくまで例示のみを意味する。

ᄇᄇᄇᄇᄇは付けられない。

抽具、節を取れる。

ᄇᄇᄇᄇ

例外を表す。

「～は例外である」「～を除いて」「～以外は」などと訳す。

詳細はoV-と同じ。

⊙

oV-は例示を意味する。「例えば」と訳す。比喻の「例えば」の意味はない。あくまで例示のみを意味する。その動詞で表されている事柄の例を表す(1)。

(1) -Λ J-Λe J(e) oV- YeΛ (私は野菜が好きだ。例えばキャベツ)

日本語では「例えば～など」といって最後になどを付けることがあるが、アルカでは0eΛは付けることができない。例えが全体の一部でしかないことは分かりきっているため、その例え以外に他の要素が存在していることは明らかである。よってわざわざ0eΛを付けることはない。

また、oV-は抽具や節を取ることができる(✓)。

(✓) -Λ cΛe- Jol- l- oV- S->θ cΛ >eΛ (私はたくさんの事故を見た。例えば飛行機が落ちたりするなど)

一方、oVcは例外を表す。「～は例外である」「～を除いて」「～以外は」などと訳す。詳細はoV-と同じである。(?)の場合、例外の1例でしかないので、キュウリ以外に嫌いなものもあるかもしれない。?cVだとキュウリしか嫌いでない。

(?) -Λ J-Λe J(e) oVc θce (私は野菜は好きだがキュウリは好きではない)

。

Λ : -JΛ, cJΛ。

。

⊙

-JΛ

代わりの元を表す。

抽具、節を取れる。

代用品に焦点を置く。

cJΛ

代わりを表す。

抽具、節を取れる。

代用品でなく本体のほうに焦点を置く。

「～の代わりに」はcJΛでなく-JΛ。



⊙

- $\mathcal{N}$ は代わりの元を表す。逆に $c\mathcal{N}$ は代わりを表す。今本当はワインが飲みたいのだがビールしかないのでビールを飲む場合、ワインが代わりの元でビールが代わりである。従って「私はワインの代わりにビールを飲んだ」は(1)のようにいう。(1)は「ビールよりも飲みたい本命のワインを飲んだ」という意味だが、日本語では馴染みがなく、アルカでも実際聞いたことがない。

(1)  $-\Lambda \cup e\Lambda\text{:- } \mathfrak{d}e\mathcal{M} \ c\mathcal{N} \ \mu ec。$

(1)  $-\Lambda \cup e\Lambda\text{:- } \mu ec \ -\mathcal{N} \ \mathfrak{d}e\mathcal{M}。$

。

$\mathcal{N} \circ : \langle a\mathcal{N}, \mathfrak{Y}-\mu。$

。

⊙

$\langle a\mathcal{N}$

交換を意味する。「～と引き換えに」と訳す。

その動詞が起こるために何を差し出さねばならないかを表す。

$\mathfrak{Y}-\mu$

$\mathfrak{Y}-\mu$ は金額を表す。単位は数量に後続できる。 $\mathcal{N}-\mathcal{I}$ と組み合わせても良い。

単位はソルトやセルトのことだが、何だか分かっている場合は省く。

宝石、労働、売春、人身売買など、代価となるなら何でも表せる。

$\mathfrak{Y}-\mu$ の場合、一度交換したものをもう返さないというのが前提にある。

⊙

$\langle a\mathcal{N}$ は交換を意味する。「～と引き換えに」と訳す。その動詞が起こるために何を差し出さねばならないかを表す(1)。

(1)  $-\Lambda \ \langle -\mathcal{N}\text{:- } \mathfrak{Y}cl \ \langle a\mathcal{N} \ \rangle co$  (娘を売って金を得た)

(1)  $-\Lambda \ \mathcal{I}-\mathfrak{d}\text{:- } \mathcal{Y}\text{-}\mathfrak{d} \ \langle a\mathcal{N} \ -\mathfrak{d} \rangle$  (車と引き換えにバイクを貸した)

一方、 $\mathfrak{Y}-\mu$ は金額を表す。単位は数量に後続できる。 $\mathcal{N}-\mathcal{I}$ と組み合わせても良い。単位はソルトやセルトのことだが、何だか分かっている場合は省く(?)。

(?)  $-\Lambda \ \mathcal{N}\langle \mathfrak{Y}\text{:- } \mathcal{C}a \ \mathfrak{Y}-\mu \ 100$  (100 ソルトでこれを買った)

尚、 $\mathfrak{Y}-\mu$ は金額以外にも代価なら何でも取れる、つまり、払えるものなら金でなくとも何でも良い。宝石、労働、売春、人身売買など、代価となるなら何でも表せる(0)。

(0)  $\neg \wedge \langle \neg \neg - \forall cl \forall - \mu \rangle co$  (娘を売って金を得た)

では(1)(/)と(0)の違いは何か。 $\langle a \cap$ の場合、一度交換したものを後ほど互いに返し合う可能性が前提にある。貸したバイクは戻って来るのが当然だし、返ってきたら車も返さねばならない。金も返さねばならないし、その場合は当然娘も返る。

ところが $\forall - \mu$ の場合、一度交換したものをもう返さないというのが前提にある。売買と同じで、一度買ったものはずっと自分の物で、後から返せとは言われない。その代わり、出した金も返ってこない。無論、返品もありうるが、全体の売買数から見れば稀である。

従って(0)の場合、金を返したところで売られた娘は戻らない。強いていえば娘を自分で買い戻しでもしないかぎり娘は戻らない。

また、客と店なら返品も可能であるが、個人と個人、企業と企業はふつう返品できない。 $\forall - \mu$ は「これは売買で、引き換えたものは戻らない」という理解がある。そのため、返してくれというのは違反である。店なら誠意として返品を許すが、個人や企業同士の場合そうはいかない。

。

$\forall \neg : \neg - V, \neg cV$ 。

。

。

$\neg - V$

「～を含んで」という意味。含意を表す。

物理的に含んでいる場合も使えるが、主に集合に含んでいる場合に使う。

ふつう $\neg - V$ は動詞に対し、 $\circ \wedge$ に関して使われる。

$al$ にかける場合、 $al$ の解釈しかありえないよう明示する。

節も取れる。

$\neg cV$

$\neg cV$ は集合に含まないことを表す。「～以外は」という意味である。

$\circ \forall c$ は例外であったが、 $\neg cV$ は集合の成員外である。

$\circ \forall c$ の場合、他にも例外があるかもしれないが、 $\neg cV$ の場合、他に成員外は存在しない。

。

$\neg - V$ は「～を含んで」という意味。含意を表す。物理的に含んでいる場合も使えるが、主に集合に含んでいる場合に使う(1)。

(1)  $\neg \wedge \neg \wedge \exists e \cup (e) \cup -V \exists e \cup$  (キャベツも含んで野菜が好きだ)

ふつう $\cup -V$ は動詞に対し、 $\circ \wedge$ に関して使われる。「キャベツを含んで」は「野菜」と「好き」にかかり、「私」にはかからない。 $\text{all}$ にかける場合、 $\text{all}$ の解釈しかありえないよう明示する(✓)。ただし、これは不自然な用法。

(✓)  $\neg \wedge \neg \wedge \exists e \cup (e) \cup -V \vdash$  (彼も私も野菜が好きだ)

尚、 $\cup -V$ は節も取れる(?)。

(?)  $\neg \wedge \text{c} \wedge \neg - \cup \text{ol} - \cup e \cup -V \text{S} \rightarrow \exists \text{c} \cup \exists e \cup$  (飛行機が落ちた事故も含んで、事故を見た)

一方、 $\cup \text{c} \cup$ は集合に含まないことを表す。「～以外は」という意味である。 $\circ \cup \text{c}$ は例外であったが、 $\cup \text{c} \cup$ は集合の会員外である。事実上同じものを指すとしても、 $\circ \cup \text{c}$ はそれが例外であることが焦点化され、 $\cup \text{c} \cup$ は単に会員でないことが焦点化される。

(0)  $\neg \wedge \neg \wedge \exists e \cup (e) \circ \cup \text{c} \exists e \cup$

(f)  $\neg \wedge \neg \wedge \exists e \cup (e) \cup \text{c} \cup \exists e \cup$

(0)と(f)は一見同じだが、そうではない。そもそも $\circ \cup -$ には $0e \wedge$ が付けられないと $\circ \cup -$ の項で述べた。それは $\circ \cup -$ が一例でしかなく、他にも例が存在することは分かりきっているため、わざわざ $0e \wedge$ を付けないからである。この理屈は $\circ \cup \text{c}$ にも当てはまる。

つまり、 $\circ \cup \text{c}$ はいくつかありうる例外のうちの一つでしかない。ゆえに(0)の場合、キャベツ以外にも嫌いな野菜があるかもしれない。ところが(f)の場合、含まない集合は $\cup \text{c} \cup$ で書かれるため、キャベツしか書かれていない以上、キャベツ以外は好きだと考えられる。他に例外があると考えられるか否かが両者の違いである。

つまり、(0)は他にも嫌いなものがあるかもしれないが、(f)はそうではない。尚、(0)の場合、もしかしたらもう例外はないという可能性もある。ただ、ないともあるとも言い切れない。

。

✓:  $\cup - \cup$ ,  $\cup \text{c} \cup$ ,  $\cup \text{ol} \cup$ ,  $\cup \text{el} \cup$ 。

。

✳

その動詞を説明するのに必要な数の境界線を表す。

その数は時間的意味でも数量的な意味でも良い。

$\cup - \cup$

「以上」、 $\geq$ 、「その時点を含んでそこから未来」、「4以上 (4, 5, 6……)」。

その動詞を説明するのに必要な数の境界線を表す。

その数は時間的意味でも数量的な意味でも良い。

ㄱㄴ

「以下」、 $\leq$ 、「その時点を含んでそこから過去」、「4 以下 (4, 3, 2……)」。

その動詞を説明するのに必要な数の境界線を表す。

その数は時間的意味でも数量的な意味でも良い。

ㄱㄴ

「より上」、 $>$ 、「その時点を含まないでそこから未来」、「4 より上 (5, 6……)」。

その動詞を説明するのに必要な数の境界線を表す。

その数は時間的意味でも数量的な意味でも良い。

ㄱㄴ

「未満」、 $<$ 、「その時点を含まないでそこから過去」、「4 より下 (3, 2……)」。

その動詞を説明するのに必要な数の境界線を表す。

その数は時間的意味でも数量的な意味でも良い。

※

ㄱㄴ, ㄱㄴ, ㄱㄴ, ㄱㄴは順に「以上」「以下」「より上」「未満」を表す。即ち数学の $\geq$ 、 $\leq$ 、 $>$ 、 $<$ のことである。実際に数学用語としてもこれらを $>$ などの意味として使う。

これらは数学的な意味以外に、時間的、数量的な意味で用いられる。空間的な意味で使われることはない。

時間的な意味の場合、「その時点を含んでそこから未来」「その時点を含んでそこから過去」「その時点を含まないでそこから未来」「その時点を含まないでそこから過去」という意味である。それぞれ簡単にいうと厳密ではなくなるが、おおよそ「以降」「以前、までに」「から後」「まで」などに相当する(1)。

(1) ㄱㄴ-ㄴ ㄱㄴ  $\forall$  ㄱㄴ (3 日以内に來てください)

数量的な意味の場合、例えばその数字が0だとすると「4 以上 (4, 5, 6……)」 「4 以下 (4, 3, 2……)」 「4 より上 (5, 6……)」 「4 より下 (3, 2……)」 という意味になる。今は整数で例示したが、無論小数でもよい。

また、(1)のㄱㄴのように数量の後に単位を付けても良い。

尚、これらはふつう定量を取り、不定量や数の分からない節はふつう取らない。

これらはその動詞を説明するのに必要な数の境界線を表す。その数は時間的意味でも数量

的な意味でも良い。

。

✓ : ㄱᄇᄂ, ㄱᄇᄂᄂᄂ。

。

⊙

ㄱᄇᄂ

終点方向。「～のほうへ」。

物理的な終点への方向を表す。

ㄱᄇᄂᄂᄂなどの物理的な授受を表す終点、即ち受取人を表す。

ただし、ㄱᄇᄂᄂᄂのような物理的な授受でしかㄱᄇᄂは使えない。

-lが場所の終点を表すときなら使うことができる。

ㅇㄱᄇᄂが-lを代用するときも使える。

ㄱᄇᄂᄂ

起点方向。「～のほうから」。

詳細はㄱᄇᄂと同じ。

⊙

ㄱᄇᄂ, ㄱᄇᄂᄂは方向を表す。ㄱᄇᄂは終点方向で、ㄱᄇᄂᄂは起点方向である。順に「～のほうへ」「～のほうから」と訳す。-l, clよりも用法が狭く、結果は表さない。ㄱᄇᄂ, ㄱᄇᄂᄂは-l, clと違って特殊な意味はない。純粹に方向としての終点と起点しか表さない。

ㄱᄇᄂは物理的な終点への方向を表す。また、ㄱᄇᄂᄂᄂなどの物理的な授受に限っては終点即ち受取人として使うことができる。ㄱᄇᄂᄂᄂについても同様である。

-l, clが場所の終点を表すときならㄱᄇᄂ, ㄱᄇᄂᄂを使うことができる(1) (✓)。また、ㅇㄱᄇᄂが-l, clを代用するときもㄱᄇᄂ, ㄱᄇᄂᄂが使える(ㄱ)。

(1) -ㄱᄇᄂ ㄱᄇᄂᄂᄂ- (ㄱᄇᄂ ㄱᄇᄂᄂᄂ l- (それを彼のほうへ投げた)

(✓) -ㄱᄇᄂᄂᄂ ㄱᄇᄂᄂᄂ- ㄱᄇᄂᄂᄂ <elᄂ- (学校のほうからきた)

(ㄱ) -ㄱᄇᄂᄂᄂ ㄱᄇᄂᄂᄂ <elᄂ- (学校のほうへ行く)

もし(1)が-lなら、彼をめがけて投げたという意味である。(1)はㄱᄇᄂなので彼に当たるかどうか分からない。原則として当たらない前提である。

(✓)は学校から直接来たのではなく、学校の近くから来たということを表す。曖昧好きな日本語は学校から来ても学校のほうとぼやかすが、アルカではありえない。学校からならcl

で、学校近辺なら $\text{?e}^M$ である。

。

$\text{?A} : \text{?e}^L$ 。

。

⊙

その動詞が真である際に情報として提示されるもの。

「～によると」「～によれば」などと訳す。

$\text{?e}^L$ 句は文頭に来やすい。

$\text{?e}^L$ 句が文頭に来ない場合、後ろに来る。

$\text{>-A}$ や $\text{>cA}$ の内容も含めて情報源から情報を得ている場合、 $\text{?e}^L$ は $\text{>-A}$ や $\text{>cA}$ の後に来る。

⊙

$\text{?e}^L$ はその動詞が真である際に情報として提示されるものである。主に「～によると」「～によれば」などと訳す。

$\text{?e}^L$ は純詞にもなる。耳を使ったかどうかに関わらず、情報の伝聞であることを表す。

$\text{?e}^L$ 句は文頭に来ることが他の格に比べて非常に多い(1)。

(1)  $\text{?e}^L \text{?ec?}, \text{?el} \text{?-A} \text{?e}^L \text{-e}$  (テレビによるとあの政治家はダメだそうだ)

無論、 $\text{?e}^L$ が文頭に来なくとも良い。その際、 $\text{?e}^L$ は比較的後ろに来る。場合によっては $\text{>-A}$ や $\text{>cA}$ より後ろに来ることもある。 $\text{>-A}$ や $\text{>cA}$ の内容も含めて情報源から情報を得ている場合、 $\text{?e}^L$ は $\text{>-A}$ や $\text{>cA}$ の後に来る(1)。

(1)  $\text{?} \text{?c?} \text{-} \text{?cl} \text{-} \text{?} \text{?a} \text{?} \text{-} \text{?} \text{?e} \text{?a} \text{?e}^L \text{?ec}$  (本には彼は彼女が好きだったので金をやったとある)

。

$\text{?L} : \text{?o}^V$ 。

。

⊙

「～と～の間に」を表す。

2つのものの間を指す。

3つ以上の場合、 $\text{?o}^V$ を使う。

何人いようと2つのグループとみなされれば良く、それらの間を表すのが $\text{?o}^V$ である。

⊙

JoVは「～と～の間に」を表す。2つのものの間を指す。3つ以上の場合、>oJを使う。2つというのは厳密に2つの数とは限らない。例えば4人いて、2人ずつグループで分かれているとき、その4人は2つと見なされる。何人いようと2つのグループとみなされれば良い。それらの間を表すのがJoVである(1)。(1)のエルトとサールは複数の神である。

(1) -A JoV-AcA JoV eM/J--M (エルトとサールの間に立っている)

また、時間として使う場合、ある期間の中で最低1度という意味を表す(V)。

(V) c c 7e7-i -A JoV JoV c a (今週中に私のところに来てください)

。

70 : Zo7, Ze7。

。

⊗

Zo7

「～を応用として」「応用品として」である。頻度は少ない。

応用品がZo7に来る。基本品ではない。

Ze7

「～を基盤とした」「～を基本とした」「～を応用した」という意味である。

抽具を取る。節も取れるが、ふつうは語を取る。

⊗

Ze7は「～を基盤とした」「～を基本とした」「～を応用した」という意味である。抽具を取る。節も取れるが、ふつうは語を取る(1)。

(1) -A l-l-i- >c7J J-l Ze7 >c7J Jcl (古い歌を基盤に新しい歌を作った)

Zo7は反対に「～を応用として」「応用品として」である。頻度は少ない。応用品がZo7に来る。基本品ではない。基本品をこれから応用するという意味ではなく、応用品はこれであるという意味である。詳細はZe7と同じである。

(V) -A V-7i7- Jo7- Jcl Zo7 Jo7- J-l (新しい事故を応用と考え、そこから基本となる古い事故を解決した)

。

71 : 7-J7。

。

⊗

過程を表す。「～の途中で」という意味である。

語、節を取れる。抽具を取れる。

行為的な意味を持つ語や節を取る。非行為的な語はとりにくい。

☉

㊦-㊦は過程を表す。「～の途中で」という意味である。語、節を取れる。抽具を取れる。行為的な意味を持つ語や節を取る(1)。勉強や帰宅など、行為的な語はとりやすく、好きなどの非行為的な語はとりにくい。

(1) -㊦ -㊦㊦- ㊦- ㊦-㊦ ㊦e㊦ (帰宅途中で彼に会った)

。

㊦㊦ : ㊦㊦㊦, ㊦e㊦。

。

☉

㊦㊦㊦

「～つ前」という順番を表す。

その動詞が誰や何の前にかかるのかということを表す。

「～の～個前に」というのが本義である。

例えば「君の2人前に」という場合は㊦㊦㊦ ㊦- e ㊦cという。

「君の1人前に」の場合、1人(㊦㊦ e)が省略されて㊦㊦㊦ ㊦cになる。

単位を明示したければ数量の後につける。㊦-㊦と共起できない。

数量には具体的な数字しかこれない。

㊦e㊦

「次」を表す。

本義は「～の～個後」である。

詳細は㊦㊦㊦と同じである。

☉

㊦㊦㊦は「前」という順番を表す。その動詞が誰や何の前にかかるのかということを表す(1)。

(1) -㊦ ㊦e㊦- ㊦㊦- ㊦㊦㊦ ㊦c (君の前に行った)

(1)では㊦㊦㊦は1つ前の順番を表すが、では2つ前の場合はどうするか。実は㊦㊦㊦は「～の～個前に」というのが本義である。例えば「君の2人前に」という場合は㊦㊦㊦ ㊦- e ㊦cという。ただ、「君の1人前に」の場合、1人(㊦㊦ e)が省略されて㊦㊦㊦ ㊦cになっているだけである。



従って2つ前は(ノ)のようになる。

(ノ) -Λ ㇗e㇗- ㇗o- ㇗oJ ㇗- e ㇗c (君の2人前にそこへ行った=君の前の前にそこへ行った)

(ノ)の㇗-は数量で、単位が何か書かれていない。e ㇗cが後続することで人だと判断されるため、単位が省略されている。もし単位を明示したければ数量の後につける(㇗)。㇗oJの後に来る数量は定量で、節は取れない。具体的な数字しかこれない。よってこの場合、㇗-は使えない。使う必要がないからである。

(㇗) -Λ ㇗e㇗- ㇗o- ㇗oJ ㇗- laΛ e ㇗c。

一方、㇗eJは「次」を表す。本義は「～の～個後」である。詳細は㇗oJと同じである(㇗)。

(㇗) -Λ c(㇗)㇗o la㇗㇗ ㇗eJ ㇗- laΛ e ㇗c (君の2人後にチケットを買う=君の次の次にチケットを買う)

。

㇗㇗ : ㇗㇗Λ, e㇗Λ。

。

㇗

㇗㇗Λ

交差を表す。「～と交差して」。

移動動詞とともに使われ、その移動の軌跡が何と交差するかを表す。

頻度は少ない。

e㇗Λ

e㇗Λは平行を表す。「～と平行で」「～に沿って」。

詳細は㇗㇗Λと同じである。

V-㇗とは違う。e㇗Λは川に沿って歩くが、V-㇗は川の中を歩く。

㇗

㇗㇗Λは交差を表す。移動動詞とともに使われ、その移動の軌跡が何と交差するかを表す(1)。

(1) -Λ la㇗㇗- ㇗oΛ ㇗a ㇗㇗Λ ㇗oΛ le (あの道を交差してこの道を通った)

格詞の㇗㇗Λ, e㇗Λは頻度が低い。「あの道はこの道と交差している」などという場合、(ノ)のように自然名詞を使う。

(ノ) ㇗oΛ ㇗a e㇗ ㇗㇗Λ -l ㇗oΛ le

一方、e㇗Λは平行を表す。詳細は㇗㇗Λと同じである。

V-㇗とは違う。(㇗)では川に沿って歩くので、道を歩いている。(㇗)では川の中を歩くので、

道でなく水の中を歩いている。

(?) -Λ ʔeɣ- eʔΛ eʔe

(0) -Λ ʔeɣ- V-μ eʔe

。

ʔ0 : -ʔΛ, cʔΛ。

。

⊙

-ʔΛ

-ʔΛは「近い」を表す。その動詞が起こる近くに何があるかを示す。

-ʔΛは場所的な近さと時間的な近さと、程度の近さと心理的な近さを表す。

場所的な近さは距離の短さである。

程度の近さとは、もう少しでそうなるという意味での近さである。

心理的な近さとは親近感のことである。

ただし、心理的な近さは親近感を覚えている相手を直接修飾するので格詞は取らない。

数量的な近さは取ることができない。

cʔΛ

「遠い」を意味する。

詳細は-ʔΛと同じ。

⊙

-ʔΛは「近い」を表す。その動詞が起こる近くに何があるかを示す。

-ʔΛは場所的な近さと程度の近さと心理的な近さを表す。場所的な近さは距離の短さであり、これは単純明快である。場所のみを取り、ふつう語を取る(1)。この-ʔΛはɔʔΛが代用したʔ-の代わりである。

(1) -ʔe ʔa ʃ-ɣe -ʔΛ ʔo- (その店はこの近くにある)

程度の近さとは、例えば「瀕死」の「瀕」のことである。もう少しでそうなるという意味での近さである。(1)は日本語に直訳すると不自然な文である。言い換えれば日本語ではそのような表現をしないということである。こういう文にこそアルカの独特性が現れるので注意が必要である。

(1) 1- V-ʔɣ- μeʃ -ʔΛ Vɔʔʔ (彼は死の近くで敵と戦った=彼は死にそうになりながら敵と戦った)

また、心理的な近さとは親近感のことである。ただし、心理的な近さは親近感を覚えている相手を直接修飾するので格詞は取らない。

尚、数量的な近さは取ることができない。日本語で「1億円に近い大金」ということができるので近いで数量の近似値を表せそうだが、アルカでは数量の近さを表す場合、Vc-を使う(0)。

(0) X-Λ c( )>- (a δ-μ - (Λ 1000 → -Λ c( )>- (a δ-μ 1000 Vc-

一方、c(Λは逆に「遠い」を表す。詳細は-(Λと同じである。

。

リ : (o)。

。

⊙

角度を表す。数学や物理的な角度を表す際に使う。

(o)は頻度が低い。

角度はアルカでは0~360度までである。

oΛと組み合わせて交差角度を表すことがある。

⊙

(o)は角度を表す。数学や物理的な角度を表す際に使う(1)。

(1) -Λ J( )-Λ cΛ (o) |oΛ- (90度で立っている)

(o)は頻度が低い。

oΛと組み合わせて交差角度を表すことがある(∨)。

(∨) oΛ (a e( oΛ -| oΛ le (o) |oΛ- (この道はあの道と90度で交わっている)

。

リ : >o, >e。

。

⊙

>o

>oはその動詞が何と接触して行われているかということを表す。

物理的な接触と時間的な接触を表す。

物理的な接触とはそのままの意味である。「くっついている」ということである。

時間的な接触とは連続性のことである。

>oし, >eしは位置を表すすべての格詞と組み合わせさせて複合語を作ることができる。

>eし

>eしは離れていることを意味する。

やはり場所的にも時間的にも使える。詳細は>oしと同じである。

⊙

>oしはその動詞が何と接触して行われているかということを表す。物理的な接触と時間的な接触を表す。

物理的な接触とはそのままの意味である。「くっついている」ということである。従って抽象的な動詞でなく、存在や移動など、場所と関係する動詞と共起しやすい(1)。

(1) ʔeʔ ʔa ʃ-ɿc ʔo- >oし ʔeʔ le (このボールはあのボールと接触して、ここにある)

ʃ-ʌɿeなど、接触と関わりない動詞とは共起できない。(ʔ)は意味不明である。

(ʔ) X-ʌ ʃ-ʌɿc la >oし ʔc。

時間的な接触とは連続性のことである。ʔという事柄に連続してʔという事柄が存在する場合、ʔとʔは時間的に接触しているといえる。尚、ʔ >oし ʔではʔのほうが過去である。ʔがʔに連続するため、ʔのほうが未来である。

時間的な連続と見れば(ʔ)は解釈可能になる。即ち「あなたの次にすぐ彼を好きになった」という意味である。

逆に>eしは離れていることを意味する。やはり場所的にも(ʔ)時間的にも(ʔ)使える。詳細は>oしと同じである。時間的な>eしとは事柄の非連続性である。

(ʔ) -ʌ loɿɿ- ʔoʌ >eし ʔ- (私は彼と離れて道を歩いた)

(ʔ) -ʌ ʃ-ʌɿc la >eし ʔc (あなたを好きになって時間を置いてから彼を好きになった)

尚、>oし, >eしは位置を表すすべての格詞と組み合わせさせて複合語を作ることができる。h-は「上に」という意味だが、上に乗っかっているのか離れているのか不明である。

そこで接触した上を表すために複合語として新しい格詞h->oしが生まれる。これは「上部接触で」という意味である。逆に、上空でという場合はh->eしになる。

このことはh-だけでなく、すべての位置を表す格詞に使える。ʃ-, ʔ-など、すべてである。

ところで、>oし, >eしなど、位置を表す格詞はʔ-の代わりになることがある。oʌがʔ-の代わりをしているとき、oʌはe>化する。勿論、ʔ-の代わりをしなくても良い。

(ʔ)ではlaはʔ-ではない。私がいる場所はʔo-であってlaではない。ゆえにʔo-はlaでなく、oʌはe>化しない。ところが(ʔ)では>oし <eʔ- (学校に接した場所) そのものがʔ-である。ゆえ

にəʌが代用しているʔ-を今度は>əʌが代用する。そしてəʌがe>化する。

(ʔ) -ʌ ʌ-ɔc ʔə- >əʌ la。

(ʔ) -ʌ ʌ-ɔc >əʌ <elʔ-。

。

ʔʔ : ʔ-, ʔc。

。

⊙

ʔ-

「前に」という意味で、空間的、順序的、時間的な意味で使える。

空間的な前と順序的な先と時間的な過去の意味を持つ。

空間か時間かは文脈で判断する。

ʔ-, ʔcはいずれも節を取れる。特に順序と時間の場合は節を取りやすい。

ʔ-節動詞は未来形を取る。ʔc節動詞は過去形を取る。

ʔc

ʔcはʔ-の逆である。即ち、空間的な後ろ、順序的な後、時間的な未来を表す。

ʔ-節動詞は未来形を取る。ʔc節動詞は過去形を取る。

⊙

ʔ-は「前に」という意味で、空間的、順序的、時間的な意味で使える。プロトタイプにあるのは空間的な前である。目の付いている方向である。また、人が並ぶとき、前のほうが後ろより先である。そこから順序的な意味が生まれた。

そして順序的に先であるほうが行為を早く済ませられる。つまり、ʔが列に並んで切符を買ったのが7時だとすると、ʔの前に並んでいたʔは6時には切符を買える。ʔのほうが過去である。つまり、順序的に先なものは過去を表す。よって前は過去という時間的な意味を持った。

このように、ʔ-は空間的な前と順序的な先と時間的な過去の意味を持つ(1) (ʔ) (ʔ)。

(1) -ʌ lo<ɔ- əəʌ ʔ- ʔc

(ʔ) -ʌ ʔeɔ- <elʔ- ʔ- ʔc

(ʔ) -ʌ ʌəʌɔ- əə< ʔ- ʔeʔ

一方、ʔcはʔ-の逆である。即ち、空間的な後ろ、順序的な後、時間的な未来を表す。

空間と他の 2 つは区別が付きやすいが、順序と時間はしばしば区別しづらい。ただ、順序

が先なら時間も先なのは当たり前だから、そもそもあまり細かい区別は必要でない。問題はむしろ空間と時間である。

空間と時間がどちらもJ-なので、誤解することがある。(1)は君より過去に歩いたのか、前を歩いたのか分からない。その場合、文脈で判断せざるをえない。

尚、J-, Jcはいずれも節を取れる。特に順序と時間の場合は節を取りやすい(①)。

(①) -Λ >ɔŋɔ- J- ʃc >ɔŋɔ

J-節は主節が何と比べて過去であるかを表す。(ʔ)ではパンを食べたほうが過去である。つまり、逆に言えばJ-節は主節に対して未来である。よってJ-節の動詞は未来形を取る。事実(①)はそうになっている。逆にJc節の動詞は過去形を取る(ʔ)。

(ʔ) -Λ leVɔ- <elʔ- Jc ʃc ɔVɔ- ʔɔ-

。

ʔΔ : h-, hc, ɟ-, ɟc。

。

⊙

いずれも位置を表す格詞である。

J-より用法が狭く、空間的な意味しか持たない。

h-

上に。

hc

下に。

ɟ-

右に。

ɟc

左に。

⊙

いずれも位置を表す格詞である。空間のJ-, Jcと詳細は同じなのでそちらを参考にすること。

これらはJ-より用法が狭く、空間的な意味しか持たない。意味は順に「上に」「下に」「右に」「左に」である(1)(ʔ)。

(1) S->ɟ ʃ-ɔc h- -Λ (飛行機が上にいる)

(ʔ) -Λ ɔ<ɔ- ɟɔΛ ɟ- la (彼の右で道を歩いた)

これらはいずれも話者の視点で述べる方向である。例えば上はふつう空の方向であるが、宇宙や水中では頭のほうを指すことがある。左右も当然話者の立位置によって変わる。

。

ㄣ: Zɔŋ, Zeŋ.

。

⊙

Zɔŋ

「頂点に」という意味である。ふつう空間的な意味で使う。

Zeŋ

「底に」という意味である。

⊙

これらも位置を表す格詞である。順に「頂点に」「底に」という意味である。ふつう空間的な意味で使う(1)。

(1) -ʌ ʃ-ɻc Zɔŋ 0-l.

(1)の頂上とは山の頂上のもので、Zɔŋがŋ-を代用するɔʌを更に代用している。これは空間的な頂上である。Zɔŋは頂上が認識されるものなら何でも良い。h-ʌɔcや0-lなどは勿論、くeŋ-やμ-など、屋上を持つものでも良い。その際は屋上と訳すほうが妥当である(∨)。

(∨) -ʌ ʃ-ɻc Zɔŋ <eŋ- (学校の屋上にいる)

一方、Zeŋは「底に」という意味である。

。

00 : μ-ŋ, μcŋ.

。

⊙

μ-ŋ

「～を超えて」を意味する。

空間的意味と時間的意味がある。

μcŋ

「～を超えないで」「～のこちら側に」という意味である。

詳細はμ-ŋと同じである。

⊙

μ-7は「～を超えて」を意味する。空間的意味(1)と時間的意味(ノ)がある。

(1) -Λ 7eλe <el7- μ-7 0-l (山を越えて学校に行く)

(ノ) -Λ 7eλoC <el7- μ-7 (ccfel (2時過ぎに学校へ行きはじめるだろう)。

時間的意味の場合、その時間を越えた時点を指す。つまりその時間を越えた未来のことである。ただ、未来ならいつでも良いかということそうではない。(ノ)の場合、2時を過ぎた瞬間から動詞を始めねばならない。ゆえにせいぜいこの場合、2時数分のできごとである。

一方、μc7は「～を超えないで」「～のこちら側に」という意味で、μ-7の反対である。詳細はμ-7と同じである(?)。

(?) -Λ leVλo7 7o- μc7 <e- C- (2時前にはこちらに着くだろう)

。

01 : loJ, leJ。

。

⊙

loJ, leJ

2, 3次元の内側外側を指す。

⊙

警察のキープアウトの黄色いテープがある。あれを事故現場側、つまり内側から見た場合のテープの表面をloJといい、野次馬側から見たテープの表面をleJという。。

いまのは2次元の例だが、箱の場合、箱の中に入ったときの壁がloJで、箱を外から見たときの面がleJである。いずれにせよ面積について表す。

(1) <c し-λc loJ 7oVδ (箱の内側に何かへばりついてる?)

。

0V : >oJ, >eJ。

。

⊙

>oJ

中心を表す。「～の真ん中で」という意味である。

2つの間の中心にある場合はJoVでも良い。

2次元体と3次元体に使える。

囲むものがなくとも想定さえすれば中心を考えられるため、>oJが使える。



>eJ

囲んでいる軌跡を指す。

つまり「～の周辺で」という意味である。

囲むものがなくても>eJを想定できる。

⊙

>oJは中心を表す。「～の真ん中で」という意味である。2つの間の中心にある場合は>oJでなくJoVを使っても良い。

>oJは2次元体と3次元体に使える。2次元体は例えば紙に円を描いた場合で、円の中心が>oJになる。一方3次元体は例えば球の重心が中心になる。

>oJは円のように軌跡が明示されているものだけでなく、軌跡が良く分からないものにも使える。女を3人の男が取り囲んでいるとき、3人の男は線で繋がっているわけではない。決して円形を描いているわけではない。しかし人間は3人の取り囲む男をひとまとめに認知し、そこにはないはずの円の軌跡を想定する。これが人間の自然な認知である。そして想定された円の軌跡から中心を考える。その中心とは即ち女である。

しかも人間の認知はそれがおおよそ円だと思えば満足する。本当はちょっと楕円だったり、実は円でなかったりするかもしれない。だが、人間にとってはおおよそ円だと認知できれば常に>oJを考えることができる。

勿論、円だけでなく、4人が四隅を囲っていれば、見ている人は彼らに四角形を想定する。

そしてその重心に女を置き、>oJという。このように、厳密な図形は問題にならない。単に囲んでいる何かから軌跡を想定し、その重心に>oJを置くという大雑把な認知である。

一方、>eJは囲んでいる軌跡を指す。つまり「～の周辺で」という意味である。四角形で囲んでいる図を想定すればその軌跡が>eJになる。円なら円周が>eJになる。

また、囲むものがなくても>eJを想定できる。人間は、誰かが立っている周りの空間を想定することができる。状況によって半径は異なるが、立っている人の周りには彼のパーソナルスペースがあり、そのスペースの境界線が円の軌跡を描いている。

そして人間はその実際には存在しない円をパーソナルスペースとして想定する。こうなれば囲うものがなくとも>eJを想定できる。

この点は>oJも同じである。囲むものがなくとも想定さえすれば中心を考えられるため、>oJが使える。

尚、>oJ, >eJは空間的意味でしか使わない。ふつう、節も取らない(1)。時間を表す「～ご

ろ」という意味もない。時間の概数はただの概数と同じく  $V_c$ -である。

(1)  $-A \cup -A \cap A \supseteq A \cap A$  (彼らの真ん中に立っている)

。

$\emptyset : \emptyset, \emptyset_e$ 。

。

⊙

$\emptyset$

中を表す。「～の中に」という意味。

2、3次元体に使われる。

$\emptyset_e$

1次元体のみを使うことができる。

2、3次元体の外部を表す。「～の外に」という意味。

⊙

$\emptyset$ は中を表す。「～の中に」という意味である。円を書いたときのその境界内や、箱の中を指す。2、3次元ともに使える。 $\emptyset_e$ は外である。

空間的な意味しか持たない。

。

$\emptyset : l_{\emptyset}, l_{\emptyset_e}$ 。

。

⊙

$l_{\emptyset}$

奥行きが想定できるものを視点方向から見たときに近いと思う場所を指す。

「～の手前に」と訳す。

$l_{\emptyset_e}$

奥行きが想定できるものを視点方向から見たときに遠いと思う場所を指す。

「～の奥に」という意味である。

厳密に言えば、遠いだけでなく、そのものの突き当たりに近くても奥といえる。

⊙

$l_{\emptyset}$ は奥行きが想定できるものを視点方向から見たときに近いと思う場所を指す。つまり「～の手前に」である。視点方向とはふつうは目の方向である。奥行きが想定できるものとは

典型的には穴である。更に、机の淵なども奥行きを想定できる。従って、例えば穴を目で覗いたときに、近いと思う場所をlcoは指す(1)。

(1) しe し-ꠘc lco ꠘ-し (穴の手前に何かある)

(1)は手前といっても穴のすぐ前という意味ではない。lco, lceは必ずそのものの内部を指す。

(1)の場合、何かがあるのは穴に入ってすぐのところである。決して穴そのものを飛び越えて穴の前を意味することはない。

一方、lceはlcoの反対で、奥行きが想定できるものを視点方向から見たときに遠いと思う場所を指す。つまり「～の奥に」という意味である。今、遠いといったが、穴がやけに浅い場合はどうか。たとえ奥にあっても穴が浅いので遠いとは思わないだろう。従って厳密に言えば、遠いだけでなく、穴の突き当たりに近くても奥といえる。

尚、これらは空間的な意味だけで使われる。

。

ꠘf : ꠘe<- , ꠘe<c , ꠘe<o , ꠘe<e。

。

⊙

これらはその動詞が起こる方角を意味する。

空間的な意味のみで使われる。

ꠘe<-

南。

その動詞が起こる方角を意味する。

空間的な意味のみで使われる。

ꠘe<c

北。

その動詞が起こる方角を意味する。

空間的な意味のみで使われる。

ꠘe<o

西。

その動詞が起こる方角を意味する。

空間的な意味のみで使われる。

ꠘe<e

東。

その動詞が起こる方角を意味する。

空間的な意味のみで使われる。

⊙

これらはその動詞が起こる方角を意味する。順に南北西東である。空間的な意味のみで使われる。語を取る(1)。

(1) -A し-ɔc ʔe<- <elʔ- (学校の南にいる)

これらに関しては特に特筆することはない。北半球でも南半球でも変わらない。

。

09 : h-l, hcl。

。

⊙

h-l

h-lは空間的な意味でしか使われない。「～の表に」を意味する。

節は取らず、語を取る。この語は場所性を帯びた名詞である。

尚、数字や文字が紙や画面に書かれている場合も使える。

hcl

「～の裏に」を意味する。

詳細はh-lと同じである。

⊙

h-lは表を表す。2次元体と3次元体が持つ面に対して使う。面には必ず表裏がある。たいてい観察者がふだん見ている面を表という。例えば服ならデザインの絵柄が書き込まれているほうが表である。ふだん着るとき、こちらが見えるように着るからである。もし一時的にひっくり返して着たとしても、ふだん見ているものと違うので裏だと分かる。

このように、表か裏かはふだん見ているかどうかというところで判断されることが多い。勿論、初めて見たものが裏返しになっていればそちらを表と誤解することもある。だが、それはふだん見ているという環境になかったためである。

2次元体の場合、例えば紙の場合、両面でないかぎり文字が書いてあるほうが表である。3次元体の場合、例えば箱の場合、箱を構成する6個の面がすべてh-lである。ただし同時に6個の面はhclでもある。ではどちらの向きがh-lかというと、箱の外から見える面がふだん見

る向きなのでh-lである。箱の中から見た内側の壁がhclである。ここでloJ, leJと意味がかわる。

同様に、警察が張る立ち入り禁止のテープの場合、2次元体であるが、箱と同じことがいえる。

基本的にh-l, hclは観測者の見方によって変わるが、慣用的に決まっているものもある。h-lには「表面的なものは本当ではないかもしれないもの」というイメージをアルカは持っている。これについては日本語にも同じ語感があり、「表の顔」などという。逆にhclには「ふだん見せない本心」というイメージがある。このことから、表は公開・表の顔、裏は秘匿・本心というイメージがつかまとう。

そしてこれを利用して慣用的に表裏を決めるものがある。例えばカードの場合、カードの内容が書いてある面は伏せてあって見えないため、秘匿・本心の面であり、hclである。

原則、格詞のh-l, hclは空間的な意味でしか使われない。「～の表に」と「～の裏に」を意味する。節は取らず、語を取る。この語は場所性を帯びた名詞である。尚、数字や文字が紙や画面に書かれている場合もh-l, hclが使える。紙や画面も空間の一部だからである(1)。

(1) (a) し→c h-l >-J (これは紙の表に(書いて)ある)

尚、(1)は(✓)といっても良いが、そのときh-lは名詞になる。

(✓) しe c↗cΛ -しc -l h-l e (a) (何かがこの表に書いてある)

。

のJ : eΛc, eΛCe。

。

⊗

eΛc

eΛcは到達程度を表す。「ㇿするほどc」と訳す。

eΛCe

eΛCeは非到達程度である。「ㇿしそうなくらいc」。

⊗

eΛcは到達程度を表す。「ㇿするほどc」と訳す。

肯定と組み合わせさせてc eΛc ㇿとなると「ㇿするほどcである」とか「ㇿであるくらいcである」という意味になる。もしcが否定の意味を表す場合、「ㇿするほどcでない」という意味である。

例えば  $\neg \exists x (P(x) \wedge Q(x))$  は「人形が好きであるくらい彼女は子供である」という意味である。それを否定した  $\neg \exists x (P(x) \wedge \neg Q(x))$  は「人形が好きであるくらい彼女は子供でない」である。

だがこれは「彼女はもう大人だ」という意味ではない。これは日常的には非文である。これではこの世界では大人が人形好きで子供が人形嫌いであることになってしまう。その上で彼女は人形が好きなほど子供ではない（＝大人である）という意味になってしまう。

日常的に正しい意味にするためには  $\neg \exists x (P(x) \wedge \neg Q(x))$  とする。意味は「人形が好きでないくらい彼女は子供でない」である。つまり「人形が好きなほど子供ではない」という意味である。

他に  $\neg$  が否定を含む例を挙げる。  $\neg \exists x (P(x) \wedge \neg Q(x))$  は「酒が好きなくらい彼女は子供でない（＝大人である）」という意味である。

逆に  $\neg$  が否定の場合どうなるか。  $\neg \exists x (P(x) \wedge Q(x))$  は「彼女は酒が好きでないくらい子供だ」である。

$\exists x \neg P(x)$  は逆に非到達程度である。「 $\neg$  そうなくらい  $P$ 」とか「 $\neg$  であるかのように  $P$  である」という意味である。 $\exists x \neg P(x)$  は実際には到達していないので、 $\neg$  で述べられることは偽である。 $\neg$  に近いものの、 $\neg$  ではない。それが  $\exists x \neg P(x)$  である。

$\neg \exists x (P(x) \wedge \neg Q(x))$  は「彼はこの問題が解けそうなくらい賢い」である。実際に彼は問題を解けないが、解けそうな位置までは来ている。

もし  $\neg$  を否定するとどうなるか。  $\neg \exists x (P(x) \wedge \neg Q(x))$  は「私がこれを捨ててしまいかねないほどこれは良くない」である。

では  $\neg$  を否定するとどうなるか。  $\neg \exists x (P(x) \wedge \neg Q(x))$  は「私がこれを君にあげ（たく）なくらいこれは良い」である。

- 。
- 。